

## フランス語における同格の諸問題

## - Problèmes de l'apposition en français -

東郷雄二

## 1. はじめに

## (1) 同格の定義 (その 1)

(名 1 + 名 2) の形で連結語なしに並置され、名 2 が名 1 を説明補足するとき、一般に名 2 は名 1 と同格に置かれていると言い、名 2 を同格辞と呼ぶ。épithète「付加辞」も動詞なしに名詞を修飾するから、同格辞は付加辞と混同され、名 2 が名 1 が並ぶというだけで、名 2 を同格辞とみなす者、名 1 + 名 2 の間に小休止がある場合だけ名 2 を同格辞とみなす者があって、同格の定義に定説はない。(朝倉季雄『新フランス文法事典』白水社、2002 ; apposition の項目)

## 【解説】

(A) 朝倉は同格をできるだけ狭い意味にとろうとしている。まず同格とは二つの名詞が連結語なしに結びつけられている場合を指す。この意味で同格は *asyndète* 「連結辞省略」構造の一種である。

発音上の小休止、書記上のヴィルギュール (*virgule*) を同格の条件とする立場からは、次の a. は同格だが b. は同格ではない。

a. *Paris, la capitale de la France* フランスの首都パリ / *Patrick Poivre d'Arbor, le président de TF1* TF1 の社長パトリック・ポワブル・ダルポール

b. *le poète Hugo* 詩人ユゴー / *le roi Louis XIV* 国王ルイ 14 世 / *la note do* ドの音

(B) 朝倉の定義では名 2 は名 1 を説明補足するとされている。*Paris, la capitale de la France* では「パリ」すなわち「フランスの首都」という説明補足がある。この意味で同格関係にある名 2 は、名 1 が何であるか、誰であるかを説明するもので、名 1 と名 2 は同じものを指す同一指示 (*coréférence*) の関係にある。実際に文法家の中には、名 1 と名 2 の同一指示を同格の条件とする者もいる。これは同格を狭く取る立場である。

(C) 同格と付加形容詞の境界は曖昧である。例えば *une joue rose* 「バラ色の頬」、*des chaussures marron* 「茶色の靴」の *rose, marron* は、元来は名詞だが辞書でも形容詞に分類されているので、これらは付加形容詞である。(ただし *marron* は性数無変化)

*une tarte maison* 「自家製のタルト」、*un mot clef* 「キーワード」、*yaourt nature* 「プレーンヨーグルト」、*des bottes tendance* 「流行のブーツ」、*un enfant prodige* 「神童」などでは名詞が付加形容詞的に用いられている。朝倉は *une tarte maison* を *une maison faite à la maison* の省略と見なして、「直接構成の補語名詞」とする。その一方、*un employé modèle* 「模範的社員」は付加形容詞としており一貫していない。これらの例では名 2 は名 1 を形容詞のように修飾しており、(B) で述べたように、名 1 と名 2 の同一指示を同格の条件とする立場からは同格ではないことになる。

## (2) 同格の定義 その (2)

ある名詞 (句) または代名詞が他の名詞の後に *virgule* で分離されて置かれ、前の名詞の意味を補足するとき、この分離された名詞 (句) または代名詞は同格 (*apposition*) に置かれているという。

Ajaccio, *chef-lieu de la Corse*, est la ville natale de Napoléon

コルシカの行政中心地アジャクシオはナポレオンが生まれた町だ。

L'aîné, *celui-ci*, s'appelle Paul. 長男はこちらの人でポールという名前です。

(注) 文法書によっては le poète *Hugo* (詩人ユゴー)、le roi *Soleil* (太陽王)、la ville de *Paris* (パリの町)、le mois de *mai* (5月) などの第2名詞を同格と見なしているものもある。

(目黒士門『現代フランス広文典』白水社、2015)

### 【解説】

目黒の記述で朝倉と異なるのは次の点である。

(1) ヴィルギュールを同格の条件としている。

(2) 名詞だけでなく代名詞も同格辞に含めている。

これによれば次のようなケースも同格ということになる。しかし、これは説明・補足というよりは強調のために使われている代名詞なので、同じように考えてよいか疑問が残る。

a. *Mon père, lui, était contre le mariage de Claire.*

父はクレールの結婚に反対だった。

また次のような例も問題になる。

b. *Moi, je ne suis pas contre.* 私は反対ではありません。

c. *Nous autres Allemands, nous avons l'habitude de juger les hommes d'après leurs œuvres.* (Curtius, *Essai sur la civilisation en France*)

われわれドイツ人はその人がなし遂げた業績に従って人の価値を判断する習慣がある。

b. では強勢形代名詞 *moi* と主語代名詞 *je* が同一指示であり、c. では *nous autres Allemands* と *nous* が同一指示である。しかし b. c. はふつう文法では、転位 (dislocation)、または遊離 (détachement) として扱われている。このように同格と転位・遊離の境界線は微妙であり、文法家の間でも意見の一致を見ない。

### (3) 同格の定義 その (3)

APPOSITION. Ce mot ne dénote pas une fonction à proprement parler, mais un cas particulier de la construction que nous appelons *mise en position détachée*.

Un terme (ou un membre) apposé est toujours séparé par une pause (marquée dans l'écriture au moyen d'une virgule) du terme auquel il se rapporte. Il est ainsi mis en relief, qu'il soit antéposé ou postposé. Quant à sa fonction, elle est identique à celle du terme (ou du membre) auquel il se rapporte : un sujet, un objet, un attribut, un complément déterminatif peuvent ainsi recevoir une apposition. Enfin, pour achever de définir l'apposition on dira qu'elle a toujours un caractère prédicatif. La distinction qui est souvent faite entre une apposition descriptive :

Type : *Cherbourg, le grand port de guerre de la Manche...*

et une apposition explicative ou identificatrice :

Type : *Henri IV, le roi d'Angleterre, est le héros d'une pièce de Shakespeare.*

se rapporte à des effets de sens secondaires qui se dégagent du contexte. Dans l'un et l'autre cas, le membre apposé se trouve à l'égard du terme auquel il se rapporte dans la même situation qu'une proposition relative prédicative.

(Wagner, R.L. & J. Pinchon, *Grammaire du français classique et moderne*, Hachette Université, 1977)

同格 : この用語は本来の意味における文法機能を指すのではなく、ある特定の構文を指すも

のであり、それは本書で「転位」と呼んでいるものの一部である。

同格におかれた語（または文要素）は常に休止（書き言葉ではヴィルギュール）によって関係する語と区切られている。同格に置かれた語はこのように、関係する語に前置されようとして後置されようとして強調されている。同格語句の文法的機能は、関係する語（または文要素）と同じである。主語も目的語も属詞も限定的補語も同格を含むことができる。最後に同格の持つ特性を述べておくと、同格は叙述的 (*prédicatif*) であることを付け加えておこう。次のような記述的な同格と、

英仏海峡に面した大きな軍港であるシェルブール

次のような説明的あるいは同定的な同格を区別することができる。

イギリス国王ヘンリー4世はシェイクスピアの芝居の主人公である。

しかしこの区別は文脈から派生する二次的な意味効果である。どちらの場合も転位された語句とそれが関係する語句との関係は述語的關係節と同じである。

### 【解説】

W&P の記述には次のような特徴が認められる。

(A) 同格を転位の一部としている。つまり同格と転位を区別していない。

これは問題であり、転位と同格は区別すべきである。転位構文では次のように、文頭または文末に遊離された名詞句を文中の代名詞で受ける。

a. *Pierre Coste, je le connais depuis longtemps.* [直接目的補語の左方転位]

ピエール・コストなら私はずっと昔から知っている。

b. *Elle est où, ta voiture ?* [主語の右方転位]

どこにあるんだ、君の車は。

a. では *Pierre Coste* と *le* が、b. では *elle* と *ta voiture* とが同一指示である。しかし転位された語句は同格のように説明・補足をしているのではない。「*le* すなわち *Pierre Coste*」、「*elle* すなわち *ta voiture*」という意味的關係ではなく、両者は照応 (*anaphore*) の關係にある。つまり、*J'ai croisé Paul. Il était énervé.* 「私はポールとすれちがった。彼はいらいらしていた」の *Paul* (先行詞) → *il* (照応詞) の關係と同じである。

一方、同格の *Paris, capitale de la France* 「フランスの首都パリ」では、*Paris* と *capitale de la France* の關係は先行詞と照応詞の照應關係ではない。照應ならば同格のような説明・補足という意味効果は生じないはずである。

**N. B.** ちなみに上の例の *capitale de la France* は無冠詞名詞句なので非指示的である。つまり現働化されておらず、外延を持たない。照應關係は一部の例外を除いて指示的な名詞句と名詞句、または名詞句と代名詞の間に成り立つ。

a. *Macron envisage une visite officielle à Pékin. Le président aura un entretien avec le leader chinois.* [固有名詞 → 定名詞句]

マクロンは北京への公式訪問を予定している。大統領は中国の主席と会談するだろう。

b. *Un camion a écrasé un chien. Il roulait à toute vitesse.* [不定名詞句 → 代名詞]

トラックが犬をはねた。トラックはフルスピードで走っていた。

また転位は主に話し言葉で用いられ、同格は逆に書き言葉に限られるということも、両者を区別する理由となる。

(B) 同格にはヴィルギュールが必要としている。

(C) 同格の多くは先行詞となる主名詞句の後に同格名詞が置かれる。

a. Paris, (*la capitale de la France*) フランスの首都パリ

しかし主名詞句の前に同格名詞を置くものもある。これを前置同格と呼ぶ。

b. *Capitale de la France*, Paris reçoit aussi de nombreuses représentations étrangères, dans le cadre de visite d'Etat, de rencontres ville à ville, d'événements culturels et sportifs, et d'échanges entre des délégations plus techniques.

(2024 年のパリ・オリンピックの公式サイト <https://www.paris2024.org/fr/>)

フランスの首都であるために、パリにはまた外国の使節団などが多く訪れます。国家元首の訪問や、都市の代表団や、文化・スポーツの催しに参加する人や、さまざまな科学技術に関する交流などがあります。

(D) 同格は叙述的 (*prédicatif*) であるとしている。

ここで言う叙述的とは、次の b.のように独立文に置かれたときに述語として働くという意味だと思われる。

a. Charlemagne, *empereur à la barbe fleurie*, revient d'Espagne. (Hugo)

ふさふさと髭を蓄えた大帝であるシャルルマーニュはスペインから帰還した。

b. Charlemagne est un (*l'*) *empereur à la barbe fleurie*.

シャルルマーニュはふさふさと髭を蓄えた大帝である

他の研究者の中には、同格名詞句は「属詞的」(*attributif*) であるとする人もいて、同じことを指していると考えられる。つまりそこには話し手の判断が含まれていることになる。

(E) 主名詞と同格に置かれた名詞との関係は *proposition relative prédicative* と同じであるとしている。

*proposition relative prédicative* という用語はあまり使われておらず、W&P の著書でも他には見当たらない。(D)の a.は次のようにパラフレーズできる。

a. Charlemagne, *qui est un (*l'*) empereur à la barbe fleurie*, revient d'Espagne.

つまり意味的に同格は非制限的關係節と同じ働きをしており、W&P はこのことを述べていると思われる。

## 2. 同格に置かれた名詞句の意味・機能

(1) 同格名詞句は文中のどのような名詞に付くか

Un substantive peut être apposé à un terme assumant la fonction :

– DE SUJET

Charlemagne, *empereur à la barbe fleurie*, revient d'Espagne. (Hugo)

– D'ATTRIBUT

Tel que je viens de le dépeindre, d'intelligence déliée, *juge excellent*, d'esprit prompt et amusé, M. A. M. écrit des tragédies. (P. Léautaud)

– DE COMPLIMENT D'OBJET

De là nous dominions la rue des Vignes, *ruelle déserte qui menait aux jardins potagers éparpillés dans le vallon de Saint-Jean*. (Colette)

– DE COMPLEMENT DETERMINATIF

L'aumônier et le Tahitien étaient à peu près du même âge, *trente-cinq à trente-six ans*.  
(Didrot)

Un substantif peut être apposé à un terme mis en apostrophe :

O moi, *univers dont je possède une vision chaque jour plus claire*. (M. Barrès)  
(Wagner & Pinchon, *op.cit.*)

同格名詞は文中で次のような文法機能を持つ名詞に付けることができる。

〔主語〕

ふさふさと髭を蓄えた大帝であるシャルルマーニュはスペインから帰還した。

〔属詞〕

私がすでに描写したように、優れた判断基準である頭の働きが早く、明敏で愉快的な精神の持ち主である A.M. 氏は悲劇を書いている。

〔目的補語〕

その場所から私たちは、人気がなくサン・ジャンの谷に点在する果樹園に続く小道のヴィーニュ通りを見下ろすことができた。

〔限定補語〕

その司祭とタヒチ人は 34~5 歳くらいで同じ年齢だった。

また同格名詞は呼びかけに使われた名詞に付けることもできる。

おお、目を追うごとにより明確に理解できるようになる世界、私よ。

**N. B.** わかりにくいですが、属詞に付く同格はコピュラ文の形に書き換えると、次のような構造になっていると思われる。

M. A. M est d'intelligence déliée, *juge excellent*, d'esprit prompt et amusé.

A. M.氏は、頭の働きが早く — それは優れた判断基準だ — 明敏で愉快的な精神の持ち主である。

## 【解説】

W&P が例を挙げて示しているように、同格名詞句は文中のさまざまな役割の名詞句に付けることができる。しかし、次の点に注意が必要である。

① 文法書や論文で取り上げられているのは圧倒的に主語にかかる同格である。それ以外の役割の名詞句にかかる同格は、ほとんど論じられていない。

② 主名詞の前と後の両方に置くことができるのは、主語にかかる同格だけである。主語以外では後にしか置くことができない。例えば下の c. d. e. は直接目的補語にかかる同格だが、同格辞を主名詞の前に置いた b. ii) は容認されない。

a. i) Charlemagne, *empereur à la barbe fleurie*, revient d'Espagne.

ii) *Empereur à la barbe fleurie*, Charlemagne revient d'Espagne.

b. i) De là nous dominions la rue des Vignes, *ruelle déserte qui menait aux jardins potagers éparpillés dans le vallon de Saint-Jean*.

ii) \**Ruelle déserte qui menait aux jardins potagers éparpillés dans le vallon de Saint-Jean*, de là nous dominions la rue des Vignes.

同格の研究のほとんどが主語にかかる同格に限られているのには、このような理由もあると考えられる。

## (2) 同格名詞句の性質と役割

1. Un substantif en apposition peut avoir une simple valeur descriptive : il dégage et souligne, dans ce cas, un trait de la personne ou de la chose évoquée par le terme auquel il se rapporte,

ou bien il donne de ce terme un équivalent périphrastique :

Paris, *capitale de la France*

Vivez et méprisez, si vous êtes déesse,

L'homme, *humble passager*, qui dut vous être un roi. (A. de Vigny)

Maintenant, à mes pieds, Aigues-Mortes, *misérable damier de toits à tuiles rouges*, était ramassée dans l'enceinte rectangulaire de ses hautes murailles. (M. Barrès)

(Wagner & Pinchon, *op.cit.*)

1. 同格に置かれた名詞句は、単純な記述的な価値を持つことがある。この場合、同格辞は主名詞が指す人や物の性質の一つを取り出し強調するか、もしくは主名詞の迂言的な言い換えとなる。

フランスの首都パリ

生きよ、そしてもし汝が女神ならば

しがない行きずりの者でありながら

汝の主とならねばならなかった男を軽蔑せよ

今や私の足下で、赤い瓦屋根が碁盤の目のようにみすぼらしく並ぶエグ・モルト

の町が、高い城壁に囲まれた四角形の内側に身を縮めるようにしている。

### 【解説】

この項目では同格辞の果たす意味的役割が論じられている。W&P がまず挙げるのは、同格辞が主名詞の性質の一つを表したり、言い換えとなっている場合である。たとえば Paris, *capitale de la France* では、「フランスの首都」はパリの持つ性質の一つであり、また言い換えともなっている。言い換えはローマを「永遠の都」と呼んだり、日本を「日出ずる国」(le pays du soleil levant) と呼んだりする修辞法である。この用法では同格辞の表す意味は補足的・副次的情報であり、多分に修辭的で省略しても文の意味が損なわれることはない。

2. Le substantif en apposition peut aussi apporter une caractérisation précise qui permet d'identifier sans aucun doute la personne ou la chose évoquée par le terme auquel il se rapporte :

Henri VI, *le roi d'Angleterre* (à distinguer du roi de France)

Pierre, *le fils de X* (à distinguer d'un autre Pierre, fils de Y)

Dans ce dernier exemple, le substantif en apposition est régulièrement déterminé au moyen de l'article défini ou de l'article indéfini.

L'homme, *une espèce de Maure*. (V. Hugo)

Dans le premier emploi, le substantif se présente en général sans déterminant.

(Wagner & Pinchon, *op.cit.*)

2. 同格に置かれた名詞句はまた、主名詞が指す人や物を正しく同定するために必要な特性を表すことがある

イギリス王ヘンリー4世 (フランス王アンリ4世と区別する)

Xの息子のピエール (Yの息子のピエールと区別する)

この用法では、同格句には規則的に定冠詞か不定冠詞が付く。

ムーア人の類である男

上記1.の用法では、同格句はふつう無冠詞である。

### 【解説】

二番目の用法では、同格辞の表す情報は主名詞の指示対象を正しく理解するために必要な情報である。挙げられている例は、複数の HenriIV や複数のピエールのどちら

であるかを区別する例となっている。また *L'homme, une espèce de Maure.* では、*l'homme* だけではあまりに漠然としすぎているので、同格辞は意味を補足し理解を助けている。

この項目で重要なのは、同格辞の冠詞の有無が取り上げられている点である。修辞的で補足的情報を表す *Paris, capitale de la France* では同格辞はふつう無冠詞で、同格辞が主名詞の指示対象の同定に必要な情報を表す *Pierre, le fils de X* や *L'homme, une espèce de Maure.* には定冠詞や不定冠詞が付くとされている。同格辞の冠詞の有無の意味的・機能的ちがいに言及した研究は非常に少ない。本当に冠詞の有無に意味的・機能的ちがいがあのだろうか。

### 3. Le substantif en apposition peut enfin être l'équivalent d'un complément déterminatif :

*Henri IV, roi de France, restaura l'économie du pays.*

(= quand il était roi de France)

(Wagner & Pinchon, *op.cit.*)

3. 同格に置かれた名詞句は限定的補語と同じ働きをすることがある。

フランス王アンリ 4 世は国家の経済を立て直した。

(=フランス国王であった時に)

#### 【解説】

W&P で「限定的補語」*complément déterminatif* と呼ばれているのは、次の例のように名詞や形容詞の補語となる前置詞句である (*op. cit.* p.24)。

*la maison de mon père* 父の家 / *un homme au teint pâle* 青白い顔色の男

*satisfait de sa condition* 条件に満足して / *âpre au travail* 仕事に熱心な

上の例の *roi de France* が *quand il était roi de France* と同じ働きをするというのならば、限定的補語ではなく時の従属節か状況補語とするべきではなかろうか。

他の研究では主語の前置同格が時や理由を表す従属節と同じ働きを持つと指摘するものが多い。

a. *Enfant, j'avais peur des loups.* (= Quand j'étais enfant)

子供の頃、私はオオカミが恐かった。

b. *Ministre de la culture, Françoise Giroud a été amenée à décorer Jean Renoir.*

フランソワズ・ジルーは文化大臣だった時 / だったので、ジャン・ルノワールに勲章を授与することになった。

Paraphrase :

1. C'est parce que F. Giroud était ministre de la culture qu'elle a décoré Jean Renoir.

フランソワズ・ジルーは文化大臣だったので、ジャン・ルノワールに勲章を授与した。

2. C'est lorsqu'elle était ministre de la culture que F. Giroud a décoré Renoir.

フランソワズ・ジルーは文化大臣だった時、ジャン・ルノワールに勲章を授与した。

(Picabia, L. « Appositions nominales et déterminant zéro : le cas des appositions frontales », *Langue française* 125, 2000)

多くの研究では、同格辞が文頭に置かれたとき、時や原因を表すことが多いとされている。しかし W&P の挙げている例は主名詞の後に置かれた同格である。この場合にも同格は時を表すのだろうか。

(3) 同格辞が補足的情報ではなく、主名詞の同定に必要な情報を表す場合

W&P は同格辞が主名詞の指示対象の同定に必要な情報を表す場合として、*Henri IV, le roi de France* / *Pierre, le fils de X* のように、複数の候補があるケースを挙げている。

しかしそれ以外にも同格辞が重要な情報を表す場合があると考えられる。それは主名詞の表す指示対象があまり知られていない場合である。

- a. Philippe Douste-Blazy, *ministre délégué à la santé*, a présenté, jeudi 2 mars, le nouveau modèle du carnet de santé. (*Le Monde*)

厚生大臣のフィリップ・ドゥースト＝ブラジーは3月2日木曜に健康手帳の新しいモデルを発表した。

- b. Hona, *ancienne employée du textile*, ne veut pourtant pas revenir en arrière.

(*Le Monde*)

元織物関係の工員のオナはもう後戻りはしたくないと思っている。

(a.と b.は中尾和美「同格における冠詞について」『フランス語研究』30より)

- c. Ils étaient partout, voyaient tout, entendaient tout. Ils : les hommes de la Securitate, *cette formidable machine à broyer l'esprit de résistance des Roumains*. (*Le Nouvel Observateur*)

彼らは至る所にいて、すべてを見、すべてを聞いていた。「彼ら」とは、ルーマニア人の抵抗精神を打ち砕く恐るべき装置であるセキュリタット（秘密警察）の職員である。

a.では固有名の Philippe Douste-Blazy に厚生大臣という肩書きを付け加えることでその同定を助けている。大臣ならば知っている人もいるだろうが、b. の Hona はたまたま記者が取り上げた無名の市民なので、文の意味の理解のためには同格辞の情報は必須である。c.の Securitate はルーマニア語の単語なので、同格辞がなければ読者は意味を理解することができない。これは新聞や雑誌などのジャーナリズムでよく用いられる手法である。

しかし a. b. の同格辞は無冠詞で、c.には指示形容詞 *cette* が付いている。W&P は同格辞が主名詞の指示対象の同定に必要な情報を表す場合には冠詞が付くとしているが、上の例はそれに当てはまらないように思える。

### (3) Substantif employé sans déterminant spécifique

— Pour le substantif apposition. Sans article le substantif a valeur d'une « étiquette », il classe dans un groupe ; avec article, il y a identification :

Henri IV, *roi de France*. / Henri IV, *le roi de France* (par opposition au roi d'Angleterre)  
(Wagner & Pinchon, *op. cit.* p. 101)

特定の限定詞なしで用いられる名詞

同格の名詞として。冠詞がないとき、名詞は「ラベル」の働きをして、集合の中に分類する。冠詞があるときは、指示対象を同定する。

フランス国王アンリ 4 世 [冠詞なし] / フランス国王アンリ 4 世 [冠詞あり]  
(イギリス国王と対比して)

#### 【解説】

この項目でも W&P はすでに見たのと同じ記述を行なっている。新しいのは無冠詞の同格辞は「ラベル」の働きをしているという指摘である。これはコンピュータ文の属詞が無冠詞の職業・身分・国籍を表す名詞のとき、属詞は外的属性を表すラベルであるという指摘と同じである。

- a. Luc est *boulangier*. リュックはパン屋だ。

- b. Suzanne est *belge*. シュザンヌはベルギー人だ。

(4) 同格辞の冠詞の有無については目黒にも短い記述がある。



先行名詞から *virgule* によって分離された同格名詞が、先行名詞の修飾語として形容詞的な機能しかもたないときには、ふつう無冠詞である。

Louis XIV, roi de France フランス王ルイ 14 世

le tigre, terreur de la jungle 密林の無法者トラ

Madame Ledoux, institutrice, mere de deux enfants

小学校教員であり二児の母親であるルドゥー先生

同格名詞が先行名詞のたんなる修飾語ではなく、名詞としての実体をもつときには冠詞がつく。

Cette grande salle, *le réfectoire*, contient les portraits des abbés.

この大広間は食堂であり、歴代修道院長の肖像がここにある。

(目黒士門『現代フランス広文典』白水社、2015)

### 3. 同格に置ける品詞、同格がかかる品詞

朝倉でも目黒でも、同格とは名詞句と名詞句（または代名詞）の関係であると定義し説明している。ところが実際の用例を提示するときには、名詞以外も同格に置かれるとされている。

#### (1) 1° 同格辞の性質

① 名詞 : Paris, *capitale de la France*

② 代名詞 : *Moi, je n'irai pas.* 私は行かないよ。

③ 形容詞・分詞 : *La foule, indignée. protesta.* 群衆は憤激して抗議した。

④ 不定詞 : *Elle comprit qu'il n'avait qu'une envie, partir au plus vite.*

彼の願いはただ1つ、できるだけ早く立ち去りたいのだということがわかった。

⑤ 節 : *Je ne désire qu'une chose : que vous soyez heureux.*

私の願いはただ1つ、貴方が幸せになることだけです。

(朝倉季雄『新フランス文法事典』白水社、2002 ; *apposition* の項目)

#### 【考察】

上記の①が最も典型的な同格であり、②はふつう名詞句や代名詞の「転位」(*dislocation*)または「遊離」(*détachement*)と呼ばれている。②は意味的・談話的機能も異なるので、同格とは区別して扱うのが適切である。

③では *indignée* は同格ではなく、主名詞を修飾する語句である。朝倉文法事典の *participe passé* の項目では、過去分詞の用法として主語の同格が挙げられている。

a. *Puis, désœuvré, l'on s'étend tout habillé sur son lit.*

それから、することがないので、服を着たままベッドに横たわる。

**N. B.** ここで問題にするのは一つ目の過去分詞 *désœuvré* である。二つ目の *habillé* は主語 *l'on* にかかる間接属詞で同格とは異なる。

一般にフランス語の文法では次のような用法の分詞を主語の同格としている。

b. *Brisée par la fatigue, elle s'endort.*

疲れてくたくたになった彼女は眠り込む。(目黒, *op. cit.* p. 272)

しかし、これは次の構文から助動詞 *être* の現在分詞 *étant* を省略したものと考えの方が妥当である。

c. *Étant brisée par la fatigue, elle s'endort.*

英文法とちがいフランス語文法では「分詞構文」を認めていないので、「主語と同格に置かれた過去分詞」と説明される。しかし、これは主語と同格ではなく、主語にかかる分詞とすべきである。*Étant brisée par la fatigue* は主節の主語と同じ隠れた主語(elle)を持つ分詞節 (proposition participiale) で、しばしば時・理由・原因などの意味を表し、状況補語として働く従属節である。したがって朝倉の③は同格から除外すべきである。

④⑤の不定詞と節は確かに同じものを指し、補足・説明する働きを認められるので、広義の同格に含めることができるかもしれない。しかし本稿ではこれは扱わない。ちなみに目黒では次のような例も同格節に含めている。

d. *Il est hostile à l'idée qu'on soumette les élèves à une discipline rigoureuse.*

彼は生徒たちに厳格な規律を課すという考えに反対だ。

e. *Le fait que vous gardez le silence peut être tenu pour un refus.*

黙っていると断っているのだと見なされるかもしれませんよ。

**N. B.** 朝倉文法では次の a. を名詞と同格の que 節、b. 以下を名詞の限定補語の que 節として区別している。これは見解のちがいである。

a. *C'est vrai ce qu'on raconte : qu'Henri va épouser Nadine ?*

噂は本当ですか。H が N と結婚するというのは。

b. *J'avais la sensation qu'il se passait quelque chose.*

何か起こっているという気がした。

c. *La certitude que ce danger rôdait autour d'elle me la faisait chérir davantage.*

こうした危険がきっと彼女につきまとっているに違いないと思うと、彼女がいっそういとしくなった。

これらは *l'idée que...* 「…という考え」、*la rumeur que...* 「…という噂」、*le fait que...* 「…という事実」のように、補文の que 節を取る限られた名詞に関わる現象であり、広義の同格にも含めない方がよいと思われる。

## (2) 2° 被修飾語の性質

① 名詞 : *Paris, capitale de la France*

② 代名詞 : *Nous sommes ensemble, elle et nous, ses enfants.*

私たちはみんないっしょなんですよ、母も子どもである私たちも。

③ 不定詞 : *Travailler, grand devoir, est aussi une joie.*

働くことは大きな義務であるが、それはまた楽しいことでもある。

④ 節 : *A cette époque, souvenir gênant, il était ce qu'on appelle un brillant élève.*

当時は、これは照れくさい思い出なのだが、彼はいわゆる優等生だった。

*De taille petite, on eût dit un enfant, n'eût été sa voix très grave.*

(= Comme il était de taille petite)

背が低かったから、非常に太い声をしていなかったら、子供と思われただろう。

(朝倉 *op. cit.*)

## 【考察】

①②③は特に問題はない。③の不定詞も名詞として用いられているので、すべて広

義の名詞が主名詞となっている。

④の1つ目の例の *souvenir gênant* は *ce qui est un souvenir gênant* の省略形と見なすことができる。朝倉は挙げていないが、次のような *ce qui / ce que* 節も同格節である。これは節と節の同格と見なして特に問題はない。

a. *Nous n'avons pas d'enfant, ce qui est dommage.*

私たちには子供がいないが、それは残念なことだ。(目黒 *op. cit.*)

b. *Le vieillard, ce qui ne lui était jamais arrivé, leva les mains.*

(Grevisse 1980 cité dans Van den Bussche, H., « Typologie des constructions dites appositive », *Travaux de linguistique* 17, 1988)

過去に一度もしたことがないが、老人は手を上げた。

これに対して2つ目の例は問題がある。朝倉自身がカッコに示しているように、*De petite taille* は *Comme il était de petite taille* の省略なので、これは同格ではなく理由を表す従属節の一部とするべきである。

(3) 長沼 (2004) は同格がかかる主名詞の統計調査結果を示している。

支え	名詞句		固有名詞		代名詞		計
	人	人以外	人	人以外	人	人以外	
右方同格	21	13	246	48	1	0	329
左方同格	15	1	19	3	24	0	62
合計							391

それぞれ例を示す。

〔右方同格〕

a. [人] *Jacques Buvat, endocrinologue lillois, est de ceux-là.*

リールの内分泌学者のジャック・ビュヴェもその一人である。

b. [人以外] *Sous les traits de Rivière, Daurat est même héros de « Vol de nuit », récit que les hommes de l'Aéropostale n'apprécieront guère.*

小説の中でリヴィエールとして描かれているドラは、『夜間飛行』では主人公と言ってもよい。この小説はアエロポスタル社の人たちには評価されないことになるのだが。

c. [代名詞] ... *cette horeur du mensonge qui est au cœur de la culture civique américaine et que nous Français, enfants de Saint-Simon et de Sacha Guitry, étions accoutumés à considérer avec ironie.*

アメリカの市民文化の中心にあり、サン・シモンとサッシャ・ギトリの子供であるわれわれフランス人が皮肉交じりに尊重してきたあの恐ろしい嘘

**N. B.** 長沼はこれを代名詞の例としているが、主名詞の *nous Français* は「私たちフランス人」のように *Français* が主要部なので、代名詞の例とするのは不適切である。

〔前方同格〕

a. [人] *Amateurs d'art, mécènes, archéologues, les empereurs chinois ont accumulé des trésors.*

芸術の愛好家でメセナで考古学者でもあった中国の皇帝たちは財宝を蒐集した。

b. [人以外] « *Véritable garde-fou, la lutte antitrust a permis aux Etats-Unis de corriger les excès du capitalisme* », analyse Christian Stoffaës.

「真に有効な歯止めである反トラスト対策のおかげで米国は資本主義の行き過ぎを防ぐことができた」とクリスチャン・ストファは分析している。

c. [代名詞] *Sculpteur et peintre, il [=Tchang Tchong-jen 張充任] vivait en France depuis 1984.*

彫刻家で画家でもある彼は 1984 年からフランスに住んでいた。

### 【考察】

① まず人と人以外を比較すると、圧倒的に人が多い。これは調査対象が主に新聞・週刊誌だったことにもよるかもしれない。また右方同格では人が多く、なかでも次のような固有名詞が多いという。

i) *Jean Tiberi, maire de Paris* パリ市長のジャン・ティベリ

このような同格は固有名詞に馴染みのない読者に補足的情報を与えている。新聞・雑誌によく見られる手法である。

② N. B. に書いたように、長沼が代名詞としている例は実は代名詞ではないので、同格の主名詞が代名詞の例はゼロということになる。

主語代名詞の直後に同格を置くことは文法的にできない。主語代名詞は接辞 (clitique) であるため、後の動詞の支えを必要とする。

ii) \**Elle, chanteuse renommée, donnera un concert ce soir.*

名高い歌手である彼女は今夜コンサートを開く。

N. B. 証明書などの *Je, soussigné, Directeur de la Maison du Japon, certifie que...* 「私、下記に署名のある日本館館長は…であることを証明する」のような同格は、主語代名詞が自立性を持っていた古いフランス語の名残である。

しかし強勢形の代名詞には同格を付けることができるはずである。

iii) *Lui, amateur passionné de Mark Rothko, ira sûrement à New York.*

マーク・ロスコの熱烈な愛好者である彼はきっとニューヨークに行くだろう。

iv) *Je vais m'adresser à lui, grand spécialiste de Cézanne.*

私はセザンヌ研究の大家である彼に問い合わせよう。

しかし、事例がないところを見ると、実際に用いられることは少ないようだ。

③ 長沼の統計で最も注目されるのは、前方同格では代名詞が最も多いという点である。Neveu (2000) も指摘しているように、前方同格は談話の冒頭に用いられることはない。すると *Sculpteur et peintre, il ...* のような同格にも必ず先行文脈があり、そこでは *Tchang Tchong-jen* (張充任) という固有名が使われているはずである。長沼はこのことを踏まえて、代名詞は同格の実質的支えではなく、形式的支えであるとしている。

(4) 朝倉も目黒も言及していないが、次のようなタイプも広い意味で同格と見なされることがある。

a. *Chose curieuse, Françoise déteste le vin.*

奇妙なことにフランソワーズはワインが嫌いだ。

(Van den Bussche, H., « Typologie des constructions dites appositive », *Travaux de linguistique* 17, 1988)

b. *Chosse étrange* : le son, et comme la figure de votre petite phrase, revient en moi, se répète en moi. (P. Valéry, *Poésie et pensée abstraite*)

奇妙なことに、音があなたが発した短い文の姿形として私の中に立ち戻り、私の中で何度も繰り返される。

a. b.では前置された名詞句 (*Chose curieuse / Chose étrange*) とそれに続く文が同格の関係にあると考えられる。Van den Bussche (*op. cit.*)も指摘しているように、このような同格辞は次のような文副詞と似た働きを持つ。

d. *Heureusement*, Pierre connaît l'allemand.

幸いなことにピエールはドイツ語ができる。

e. *De toute évidence*, elle s'en est occupée.

明らかに彼女がそれを担当した。

実際、a.は次のように書き換えることができる。

f. *Curieusement*, Françoise déteste le vin.

このような同格と文副詞には次のような共通する特徴が見られる。

① 後続する文全体を作用域として話し手の主観的な評価や文内容にたいする態度を表す。

② 否定の作用域の外にある。つまり文の真偽値に関係しない。

*Chose curieuse / Curieusement*, Françoise {aime / n'aime pas} le vin.

奇妙なことにフランソワーズはワインが {好きだ / 好きではない}。

→ 文が否定されても「奇妙なことに」は否定されない。

③ 疑問文にできない。

\**Chose curieuse / Curieusement*, est-ce que Françoise déteste le vin ?

奇妙なことにフランソワーズはワインが嫌いなのですか。

④ 焦点にすることができない。

\**C'est chose curieuse / curieusement* que Françoise déteste le vin.

フランソワーズがワインが嫌いなのは奇妙なことだ。

→ 焦点にすることができないということは、文頭の同格辞・文副詞は文の主たる断定の作用域の外にあるということを意味している。

以上挙げた特徴は、典型的な同格が持たないものである。

① 同格辞は否定の作用域内にある。

g. *Je n'ai jamais visité Bruxelles, capitale de la Belgique.*

私はベルギーの首都のブリュッセルを訪れたことがない。

→ *Bruxelles, capitale de la Belgique* は全体として「訪れたことがない」対象である。

② 同格辞は疑問の作用域に入る。

h. *Avez-vous visité Bruxelles, capitale de la Belgique ?*

あなたはベルギーの首都のブリュッセルを訪れたことがありますか。

③ 同格辞は単独では焦点にならないが、[主名詞+同格辞]は焦点になる。

i. *C'est Bruxelles, capitale de la Belgique, que j'ai visité.*

私が訪れたのはベルギーの首都のブリュッセルだ。

以上から次のことがわかる。

(A) 典型的な同格の *Bruxelles, capitale de la Belgique* では [主名詞+同格辞] が一つの名詞句を形成し、全体が文の構成要素として否定や疑問の対象になる。[主名詞+同格辞] は主語や直接目的補語などの文法機能を担う文内要素である。

(B) 一方、*Chose curieuse, Françoise déteste le vin.* の同格辞 (*Chose étrange*) は、主節の主述関係 (*Françoise déteste le vin*) の外にある文外要素である。このタイプの同格辞には、主節が表す命題内容についての話し手の主観的評価を表すモダリティ的機能がある。このようにこのタイプの同格は、*Bruxelles, capitale de la Belgique* のような典型的な同格とは大きく性質を異にするものである。

(5) 次のような例も同格とされることがある。

Il y a dix ans, quand le programme d'études qui permet maintenant de prévoir El Niño avec plusieurs mois d'avance a été lancé, il était prévu de couvrir la totalité de l'océan tropical avec des instruments de mesure. Faute de moyens, seul le Pacifique a été équipé. *Résultat : on a dix ans de retard sur l'Atlantique et l'océan Indien.* (*Le Nouvel Observateur*)

(長沼圭一『フランス語における有標の名詞限定の文法』早美出版社、2004)  
今から10年前、何ヶ月も前にエル・ニーニョの発生を予測する研究計画が立ち上がった時、熱帯の海全体に計測機器を配置する予定であった。しかし予算不足のせいで、実際に配置されたのは太平洋だけだった。その結果、大西洋とインド洋では10年の遅れが生じた。

この例では *Résultat* という無冠詞名詞と *deux-points* 以下の文とが同格関係にある。次のように書き換えることができる。

a. *Le résultat est qu'on a dix ans de retard sur l'Atlantique et l'océan Indien.*

その結果は大西洋とインド洋で10年の遅れが生じたことである。

このタイプの同格に用いられる語には次のようなものがある。

*explication, problème, conséquence, résumé, paradoxe, exemple,*

しかしこのタイプの同格辞も主節の否定と疑問の作用域の外にある文外要素である。典型的な同格とは大きく性質が異なるものであり、同時に論じるべきものではない。

(6) 次のようなタイプの同格は、論述などの文章でよく用いられる。

a. *Il existe une taxinomie reconnue des phrases copulatives, issue des travaux de Higgins (1979), taxinomie élaborée à partir de la nature référentielle des nominaux co-présents dans la proposition.*

(Picabia, L, « Appositions nominales et déterminant zéro : le cas des appositions frontales », *Langue française* 125, 2000)

ヒギンズ (1979) の研究に由来するよく知られたコピュラ文の分類がある。その分類は文中にある名詞句の指示性に基づいたものである。

b. *L'apposé ne semble pas jouer le rôle d'un circonstant qui ancrerait spatio-temporellement la phrase, mais d'une simple identification du sujet, qui devrait permettre d'enchaîner le prédicat dans une certaine logique, logique ne relevant ni de la syntaxe, ni même de la sémantique, mais de la pragmatique.* (Ibid.)

同格辞は文を時空間に位置づける状況補語の役目を担っているようには思えない。その役目は単なる主語の同定であり、それによって述語をある種の論理の中に組み入れるのである。その論理は統語論でなく意味論ですらなく、語用論に属するものである。

ふつう同格は [A, B] のように、A と B とが言い換えの関係にある。しかしこのタイプの同格では [A, A] のように、主名詞と同じ名詞が反復される。

またこのタイプの同格の統語的特性の一つは、主名詞と同格辞が隣り合わずに離れていてもかまわないという点である。離れてもかまわないのは同じ単語を使っているために、同格辞の主名詞がどれかすぐわかるためである。このタイプの同格は、論述などで文が長く複雑になることを避けるために、同格の形で副次的な情報を付け加える目的で使用されると考えられる。

#### 4. 同格の種類

これまでの考察でわかるように、Paris, capitale de la France のような典型的な同格以外に、同格にはさまざまなタイプがある。考えなくてはならない問題はどこまでを同格と認めるかということである。言い換えれば、どこまでを共通な性質を持つ統語現象と見なすかということになる。この問題については研究者の間で意見の一致がなく、さまざまな見解が混在している。

Van den Bussche (1988) の類型論をもとにして考えてみよう。まず Van den Bussche は ① 文との同格 ② 名詞との同格 を大きく区別する。

##### (1) 文との同格

a. *Chose encore pire, Clarke donna aux alliés les renseignements les plus utiles.*

さらに悪いことに、クラークは連合国側に非常に重要な情報を渡した。

b. *Il avait conquis sa femme par enlèvement, prouesse dont l'esprit populaire s'était emparé.*

彼は妻を誘拐して自らのものとしていた。民衆はこれを快挙と見なして心を掴まれた。

Van den Bussche はこのタイプについて、他の構文との共通点を挙げて構文としての独自性はないとする。

En d'autres termes, les constructions incidentes à la phrase entière partagent leurs propriétés syntaxiques avec d'autres tournures non appositives et ne possèdent donc pas de caractéristiques syntaxiques qui leur sont propres.

Les propriétés sémantiques de la construction incidente à la phrase entière découlent de ces propriétés syntaxiques ; non intégrée à la phase à laquelle il s'associe, la construction peut être considérée comme une remarque, une observation secondaire en marge de la phrase, et précisément au sujet de cette phrase. Cette observation est en fait l'équivalent sémantique d'une proposition parenthétique. Syntagme nominal, c'est une proposition réduite au seul prédicat. On peut toutefois la récrire sous forme de phrase :

[7] Il n'ouvre pas la boîte, précaution intelligente.

[8] Il n'ouvre pas la boîte. C'est une précaution intelligente.

(Van den Bussche, H., « Typologie des constructions dites appositive », *Travaux de linguistique* 17, 1988)

言い換えれば、文全体にかかる構文は、ふつう同格とは見なされない他の構文と共通する統語的特性を有している。構文として独自の統語的特性を持っているわけではない。

文全体にかかる構文の意味論的性質は、その統語的特性に由来する。かかる文の一部として統合されないこのタイプは、文の外にあってまさにその文に関する注釈や副次的感想を表す。この感想は挿入節が表すものと同じである。[この構文の] 名詞句は述語だけに圧縮され

た文である。しかしそれは次のように文の形に書き換えることができる。

[7] 彼は箱を開けない、賢明な用心。

[8] 彼は箱を開けない。それは賢明な用心だ。

### 【解説】

Van den Bussche は名詞句が文全体と同格関係にある a. タイプについては、*Curieusement, elle déteste le vin.*「奇妙なことに彼女はワインが嫌いだ」のような文副詞との共通点を挙げて、統語的に同格として独自の性質を持つわけではないとする。また意味論的には挿入節と同じように、文に関する副次的感想を表すとする。ここで挿入節というのは次のような構文のことである。

a. Il a négligé — *c'est une impolitesse impardonnable* — de répondre à la lettre de M<sup>me</sup> Leroux.

許しがたい無礼だが、彼はルルー夫人の手紙に返事を書くことを怠った。

また文と同格関係に置かれた名詞句は、述語の属詞だけに圧縮された文であるとする。このため [8] のように *C'est une précaution intelligente.* のように *c'est* 構文で書き換えることができる。Van den Bussche はこのように文にかかる同格は統語的にも意味的にも真の同格とは言えないとする。

### (2) 名詞との同格

Van den Bussche は名詞との同格を ① 前置同格 ② 隣接同格 ③ 後置同格 の3タイプに分類する。

#### (A) 前置同格 (apposition antéposée)

前置同格には次のような特徴がある。

① 主語との同格に限られる。直接目的補語、間接目的補語、状況補語などとの同格になることができない。

a. *Voiture extraordinaire, la 2CV m'a transporté tout autour du monde.* [主語と同格]  
(Picabia, L, « Appositions nominales et déterminant zéro : le cas des appositions frontales », *Langue française* 125, 2000)

驚くべき車である 2CV は私を世界中どこにでも連れて行ってくれた。

b. *\*Voiture extraordinaire, j'ai acheté une 2CV.* [直接目的補語と同格] (Ibid.)

私は驚くべき車である 2CV を買った。

c. *\*Refuge tranquille, il passa une semaine dans le monastère de la Grande Chartreuse.*

[状況補語と同格、作例]

彼は静かな避難場所であるグランド・シャルトリューズ僧院で一週間を過ごした。

② 同格辞が名詞句の場合、必ず無冠詞である。定冠詞、不定冠詞、所有形容詞などの限定詞を付けることができない。

d. *Porte-parole du président, Hubert Védrine expose la stratégie présidentielle.*

大統領の広報官としてユベール・ヴェドリーヌは大統領の戦略を披露した。

(Picabia, *op.cit.*)

e. *\*Le porte-parole du président, Hubert Védrine expose la stratégie présidentielle.* (ibid.)

前置同格は次のような例が典型的である。

e. *Orateur remarquable, Atticus était un écrivain médiocre.* (Tesnière 1976)

アッティクスはすばらしい演説家だが物書きとしては凡庸だった。



形容詞や過去分詞や前置詞句が前置されたものも同格に含める人もいる。

f. *Instruits par l'expérience, les vieillards sont soupçonneux.* (Dauzat 1958)

経験から学んだので老人は疑り深い。

g. *D'une piété rigoureuse, il fréquentait assidûment l'église.* (Togebly 1985)

信心深いので彼は足繁く教会に通った。

また同格辞に接続詞が付いたものや、ジェロンディフや絶対構文まで同格に含められることもあるとする。確かにジェロンディフも絶対構文も、主節の主語を修飾する点では名詞句の前置同格と同じである。

h. *Bien que mal écrit, ce livre vous plaira.* (Rioul 1983)

よく書けてはいないが、この本はあなたの気に入るだろう。

i. *En disant cela, tu l'as ridiculisé.*

そう言うことで君は彼をバカにしたのだ。

j. *La mort dans l'âme, il reprit la route.*

沈み切った心で彼はまた道を進んだ。

#### (B) 隣接同格 (apposition contiguë)

主名詞の直後に同格辞を置く。次のような例が典型である。

a. *Paul, mon meilleur ami, m'aidera.*

私のいちばんの親友のポールが手伝ってくれるだろう。

b. *J'ai grandi avec elle au manoir, vieille maison isolée de tout.* (Togebly 1968)

私はあらゆるものから隔絶した古い家の田舎屋敷で彼女といっしょに育った。

隣接同格には次のような特徴がある。

#### ① 前置同格とちがって、主語以外の語句の同格になれる。

c. *Je vous présente Paul, mon meilleur ami.* [直接目的補語と同格]

私のいちばんの親友のポールを紹介するよ

d. *J'ai écrit à Paul, mon meilleur ami.* [間接目的補語と同格]

私はいちばんの親友であるポールに手紙を書いた。

e. *Le candidat idéal est Paul, mon meilleur ami.* [属詞と同格]

理想的な候補者はいちばんの親友のポールだ。

f. *Il habitait à Dijon, ancienne capitale du Duché de Bourgogne.* [状況補語と同格]

彼はブルゴーニュ公国のかつての首都だったディジョンに住んでいた。

#### ② 同格辞は無冠詞のことも、冠詞や所有形容詞や指示形容詞が付くこともある。

g. *Paris, (la) capitale de la France* [無冠詞 / 定冠詞]

h. *FIDL (Fédération Indépendante et Démocratique Lycéenne), une organisation de lycéens proche de SOS-Racisme...* [不定冠詞]

SOS-Racisme と近い立場のリセの生徒組織である FIDL

i. *Paul, mon meilleur ami* [所有形容詞]

j. *Les zaïbatsus, ces conglomérats dominant l'économie japonaise...* [指示形容詞]

日本経済を支配している企業複合体である財閥

同格辞として形容詞や前置詞句を含める人もいる。

k. *Cet élève, paresseux, a été renvoyé du lycée.* (Grammaire Larousse, 1964)

その生徒は怠け者だったのでリセから退学処分になった。

l. *La châsse, en argent gravé, était de forme rectangulaire.* (Togebly 1985)

聖遺物箱は銀製で彫刻を施されており長方形だった。

次のように同格辞に接続詞が付いたもの、ジェロンディフ・絶対構文を隣接同格の例とする人もいる。

m. *Mario, quoique d'origine Provençale, ne comprend pas l'occitan.*

マリオはプロヴァンス生まれだがオック語がわからない。

n. *Françoise, en mangeant, but du vin.* (Grevisse 1980)

フランソワーズは食べながらワインを飲んだ。

o. *L'homme, le poing levé, s'avança.* (Galichet 1962)

男は拳を振り上げると前に出た。

しかし Van den Bussche はこれらを隣接同格と認めるべきではないとする。その理由は二つある。

(I) すでに述べたように、隣接同格の大きな特徴は、主語以外の要素とも同格に置けるということである。しかし、k. 形容詞、m. 接続詞付き語句、n. ジェロンディフは主語以外の要素と同格にすることができない。(以下は東郷の作例)

i) *\*Le lycée a renvoyé cet élève, paresseux.*

リセは怠け者だとしてその生徒を退学にした。

ii) *\*Claudine a épousé Paul, quoique d'origine modeste.*

クロディーヌは（ポールが）貧しい家の生まれだったがポールと結婚した。

iii) *Nadine se promène avec Nicolas, en chantonnant.*

ナディーヌは鼻歌を歌いながらニコラと歩いている。

(鼻歌を歌っているのはナディーヌでニコラではない)

(II) 強調構文で異なる振る舞いをする。典型的な隣接同格では [主名詞+同格辞] がまとまって焦点となる。両者は緊密に繋がっているためである。

i) *Paul, mon meilleur ami, m'aidera.*

私のいちばんの親友のポールが手伝ってくれるだろう。

→ *C'est Paul, mon meilleur ami, qui m'aidera.*

私を手伝ってくれるのはいちばんの親友のポールだ。

主名詞だけを焦点とすることはできない。

→ *\*C'est Paul, qui, mon meilleur ami, m'aidera.*

しかし次の例では同格辞は主名詞といっしょに移動せず、元の位置に留まる。

ii) *Anne, parce que malade, n'est pas sortie.* [接続詞付き形容詞]

アンヌは体調が悪かったので外出しなかった。

→ *C'est Anne qui, parce que malade, n'est pas sortie.*

体調が悪かったので外出しなかったのはアンヌだ。

→ *\*C'est Anne, parce que malade, qui n'est pas sortie.*

iii) *Françoise, en mangeant, but du vin.* [ジェロンディフ]

フランソワーズは食べながらワインを飲んだ。

→ *C'est Françoise, qui, en mangeant, but du vin.*

食べながらワインを飲んだのはフランソワーズだ。

→ \*C'est Françoise, *en mangeant*, qui but du vin.

iv) L'homme, *le poing levé*, s'avança. [絶対構文]

男は拳を振り上げると前に出た。

→ C'est l'homme qui, *le poing levé*, s'avança.

拳を振り上げて前に出たのはその男だった。

→ \*C'est l'homme, *le poing levé*, qui s'avança.

これは Paul, mon meilleur ami のように同格辞が主名詞と緊密に結びついて一つの名詞句を構成しているのではなく、同格辞（とされているもの）は、文全体に対して副詞的な働きをしていることを示している。事実、これらの語句は、次のように主名詞の後ではなく、文中でいろいろな場所に置くことができる。移動が自由なのは副詞句の特徴である。これらを同格と見なすことができない所以である。

v) *Parce que malade*, Anne n'est pas sortie.

体調が悪かったので、アンヌは外出しなかった。

vi) Anne n'est pas sortie, *parce que malade*.

vii) Anne, *parce malade*, n'est pas sortie.

viii) *En mangeant*, Françoise but du vin.

食べながらフランソワーズはワインを飲んだ。

ix) Françoise but du vin *en mangeant*.

x) *Le poing levé*, l'homme s'avança.

拳を振り上げて男は前に出た。

xi) L'homme s'avança, *le poing levé*.

ただし、これに該当しないものもある。xii) のように主語にかかる同格辞が形容詞や形容詞の働きをする前置詞句のときは、強調構文にしたとき、主名詞とともに移動することも、元の位置に留まることもできる。

xii) Fabrice, *ivre de colère*, y arriva. [同格辞が形容詞]

怒りに我を忘れたファブリスはそこにやって来た。

→ C'est Fabrice, *ivre de colère*, qui y arriva.

そこにやって来たのは怒りに我を忘れたファブリスだ。

→ C'est Fabrice qui, *ivre de colère*, y arriva.

怒りに我を忘れてそこにやって来たのはファブリスだ。

xiii) Le notaire, *en colère*, a injurié le prêtre.

公証人は怒って司祭を罵った。

→ C'est le notaire, *en colère*, qui a injurié le prêtre.

司祭を罵ったのは怒った公証人だ。

→ C'est le notaire qui, *en colère*, a injurié le prêtre.

怒って司祭を罵ったのは公証人だ。

しかし Van den Bussche によると、このような場合でも同格辞が状況補語の価値を持たないときは同格に置くことができなかつたり、前置することができないという。

Mais il faut constater que le détachement exige que la construction prenne une valeur circonstancielle ; si celle-ci n'est pas présente, le détachement ou l'antéposition s'avèrent impossible. (Van Den Bussche, *op. cit.*, p. 123)

しかし遊離には同格辞が状況補語の価値を持つことが必要である。もし状況補語の価値がないと、遊離も前置も不可能になる。

前置詞句ではないが Van den Bussche は状況補語の価値を持たない例として次を挙げている。

ix) La bienveillance, *qualité si rare*, est le signe de la grandeur.

(*Grammaire Larousse* 1964)

親切心はめったにない美質で人間の大きさを示すものである。

→ \*?*Qualité si rare*, la bienveillance est le signe de la grandeur.

このように形容詞や形容詞の価値を持つ前置詞句も、Paris, (la) capitale de la France のような典型的な同格とは異なる振る舞いをするので、区別するべきであろう。

### (C) 後置同格 (apposition postposée)

この場合、同格辞は動詞の後か文末に置かれる。名詞句の他に形容詞や形容詞的な価値を持つ前置詞句も使われる。主語と同格の他に、直接目的補語 (c.) と同格のこともあるという。

a. J'assiste, *spéctateur inutile*, aux luttes. (Togebly 1968)

私は役に立たない傍観者として抗争の場にいた。

b. J'ai été amenée, *ministre de la culture*, à décorer Jean Renoir. (Picabia 2000)

私は文化大臣として / 文化大臣だったので、ジャン・ルノワールを叙勲することになった。

c. Nous l'avons rencontré, *en compagnie d'une amie*.

私たちは彼が女友達といるところに出くわした。

ジェロンディフや絶対構文も後置同格として文末に置かれることがあるとする。

d. Elle est sortie du café, *en pleurant*.

彼女は泣きながらカフェから出た。

e. Nous l'avons rencontrée, *les larmes aux yeux*.

私たちは彼女が目に涙を浮かべているところに出くわした。

ただし、次のような後置同格は文頭に前置することができ、時の従属節の働きをするので後置同格とは言えない。

f. Il est tombé dans la marmite, *petit garçon*.

彼は幼い少年だった頃、鍋の中に落ちたことがある。

→ *Petit garçon*, il est tombé dans la marmite

(=Quand il était petit garçon)

### (3) 何を本当の同格と認めるべきか

同格を3つのグループに分けた後に Van den Bussche は何をほんとうの同格と認めるべきかを論じている。

① 前置同格は、主語のみにかかり、否定や疑問の作用域の外にあることなどから、主節とは統語的に緩い関係を持つ周辺の補語 (*complément périphérique*) である。またし

ばしば時・理由・原因などの意味を表し *circonstant* 「状況項」として働く。この意味で前置同格は真の同格とは認められない。ちなみに、隣接同格や後置同格で文頭に前置できるものも同様である。

### 【考察】

同格を「名詞1と名詞2」の言い換えや補足的説明の関係と狭く定義すると、次のような前置同格はその定義から外れることになる。

*Skieur dilettante*, Nicolas Burtin est désormais leader à temps plein de l'équipe de France.  
(Picabia, *op. cit.*)

アマチュアのスキーヤーでありながら、ニコラ・ビュルタンはフランスチームのフルタイムの監督となる。

この例では文頭の名詞句は *bien qu'il soit un skieur dilettante* 「アマチュアのスキーヤーであるにもかかわらず」という逆接の従属節の役割を果たしており、主語名詞 *Nicolas Burtin* との統語的・意味的關係よりも、文全体との主節・従属節の關係の方が上回っており、文に対して副詞的役割を果たしている。

朝倉も同格辞の表す意味として、「副詞節の圧縮された表現となる」として次の例を挙げている。(朝倉 *op. cit.*) 朝倉の挙げる例はすべて前置同格である。

1. 時 : *Enfant*, j'ai cru Dieu. 子供のころ、私は神を信じました。(=*Quand j'étais enfant*)

2. 原因・条件 : *Pauvre elle-même*, elle eût peut-être méprisé cet homme, mais *riche*, elle éprouvait pour lui un sentiment confus d'admiration et de curiosité.

彼女自身も貧乏だったら、恐らくその男を軽蔑したことだろう。しかし金持だったので、彼に対して、ぼんやりとした称賛と好奇の念を抱いたのだった。(=*Si elle avait été pauvre elle-même, ... mais comme elle était riche...*)

このように前置同格は、名詞と名詞の關係ではなく名詞と文の關係であり、その關係も形容詞的修飾ではなく副詞的役割が強いと言える。

また *Van den Bussche* は、前置同格は主節に対して背景を表すとしている。

Non intégrée à la phrase, tout au plus associée à celle-ci, la construction antéposée constitue en fait une espèce d'arrière-plan (Blumenthal 1980) par rapport auquel est présentée la proposition principale. Il s'établit de la sorte entre le contenu de la proposition principale et celui de la construction antéposée une relation sémantique qui peut être très diverses : ainsi, l'on voit fréquemment la construction antéposée prendre une valeur temporelle, causale ou concessive, selon le sens global de la phrase.

(*Van den Bussche, op. cit. p. 127*)

前置同格は文に組み込まれておらず、せいぜい添えられているだけであるために、主節に対して一種の背景となる。こうして主節の意味内容と前置同格の意味内容のあいだに多様な意味的關係が生じる。主節全体の意味に応じて、前置同格はしばしば時・原因・譲歩などの意味を持つ。

背景 (*arrière-plan*) とは、断定されずしばしば前提となる副次的情報を指す。主節にたいして前置された従属節は一般に背景だとされている。

i) *Comme elle était d'origine italienne*, Yvette avait une sympathie marquée pour la musique italienne.

イヴェットはイタリア系なので、イタリア音楽を特に好んでいた。

② 隣接同格は前置同格とは異なり、主名詞と同格辞のあいだに強い関係があり、「名詞修飾補語」(complément adnominal) と見なすことができる。Van den Bussche は隣接同格と非制限的關係節の類似性を強調する。実際、多くの研究者は隣接同格を非制限的關係節で言い換えている。

i) Elle a visité Yaoundé, capitale de la Cameroon.

(= Yaoundé, qui est la capitale de la Cameroon)

彼女はカメルーンの首都ヤウンデを訪れた。

Van den Bussche は隣接同格にも非制限的關係節にも文副詞となれる副詞を挿入できることを指摘している。

ii) Ma fille, qui n'a apparemment plus un sou, m'a demandé de l'argent.

どうやら一文無らしい娘は私に金をくれと言った。

iii) Jean, sans doute mon meilleur ami, m'aidera.

おそらく私のいちばんの親友であるジャンが手伝ってくれるだろう。

この事実を根拠として Van den Bussche は、非制限的關係節と同じく隣接同格は主節とは独立に断定されており、省略された文だとしている。

Cela signifie que le contenu de ce syntagme prédicatif est lui aussi affirmé et posé indépendamment du contenu de la proposition principale ; on peut donc le considérer comme une proposition réduite au seul prédicat et le récrire comme une proposition parenthétique.

[2x] Jean — il est mon meilleur ami — m'aidera. (Van den Bussche, *op. cit.* p. 128)

これは〔隣接同格辞という〕この叙述的な名詞句の意味内容もまた、主節の意味内容とは独立に断定され置かれていることを意味する。このように前置同格は述語のみに圧縮された文と見なすことができ、次のような挿入節に書き換えることができる。

[2x] ジャン — 彼は私のいちばんの親友だ — が手伝ってくれるだろう。

ここから Van den Bussche は隣接同格だけが真の同格だとする。

En élaborant cette typologie des constructions dites appositives, nous avons pu montrer que les constructions contiguës sont les seules constructions dites appositives qui s'analysent comme de véritables compléments adnominaux ; à l'instar des propositions relatives non restrictives, on peut les considérer comme des compléments non restrictifs.

(Van den Bussche, *op. cit.* p. 132)

いわゆる同格構文の類型論を提案することにより、いわゆる同格構文の中で隣接同格だけがほんとうの意味で名詞の修飾補語と分析できることを示した。非制限的關係節と同じように、隣接同格は非制限的な補語と見なすことができる。

③ 後置同格について Van den Bussche は次のように形容詞の場合しか分析していない。したがってその考察は限定的である。

a. Elle est partie, furieuse. [主語と同格]

彼女は怒って立ち去った。

b. Ils rencontrent Marie, toute seule. [直接目的補語と同格]

彼らは一人ぼっちでいるマリーに出会う。

Van den Bussche は次の点を示している。

i) 後置同格は et によってさらに主節から切り離すことができる。

a. Elle est partie, et furieuse.

彼女は立ち去った、しかも怒って。

## b. Ils rencontrent Marie, et toute seule.

彼らはマリーと出会う、しかも一人ぼっちのところを。

これは後置同格が文全体に対して補語として働くことを示しているとする。

## ii) 後置同格辞は焦点になれず、否定することもできない。

## a. \*C'est, furieuse, qu'elle est partie.

彼女が立ち去ったのは怒ってだ。

## b. \*Elle n'est pas partie, furieuse.

彼女は怒って立ち去らなかった。

これは後置同格が文の一部として組み込まれた要素ではなく、主節述語の直接の支配下にある補語ではないことを表していると思われる。

ここから Van den Bussche は次のように結論している。

(...) la construction postposée, tout en étant incidente au terme nominal sujet ou objet de la phrase, contracte des rapports spécifiques avec le verbe constructeur de la phrase. En fait, la construction postposée décrit la manière d'être du terme nominal ; mais dans la mesure où elle contracte des rapports privilégiés avec le verbe de la phrase, cette caractérisation est présentée comme intimement liée au déroulement de l'action verbale, au cadre spatio-temporel du verbe. (Van den Bussche, *op. cit.*, p. 131)

後置同格は、文の主語または目的語と同格でありながら、文の中核となる動詞と特別な関係を結ぶ。確かに、後置同格は名詞要素のあり方を記述している。しかし文の動詞と特別な関係を持つことから、そのあり方の記述は、動詞が表す行為の展開と、動詞の時空間のわく組みと密接に結びついているのである。

## 【考察】

Van den Bussche の言うことはいささかわかりにくい。Elle est partie, furieuse. のように文末に遊離された形容詞は主語と同格だと認めている。しかし、形容詞は主語と同格でありながら、動詞とも特別な関係を結んでいるという。その関係とは、elle について furieuse であることが成立するのは、動詞が表す est partie 「立ち去った」という動作が続いている間に限られるということである。つまり形容詞 furieuse は「立ち去った」という動作に随伴する一時的状態を表す。elle はいつも furieuse なのではない。このため恒常的状态・性質を表す形容詞はこの構文で用いることができない。

## i) \*Elle est partie, blonde / grande / madadive.

彼女は金髪で / 背が高く / 病気がちで立ち去った。

ただし、次のような疑問が残る。朝倉は次の例文を挙げて、同格辞は文中でさまざまな場所に置くことができるとする。(朝倉、*op. cit.*)

## ii) Glorieux, le soldat revenait de la guerre.

栄光に包まれて、兵士は戦場から帰ってきた。

## iii) Le soldat, glorieux, revenait de la guerre.

## iv) Le soldat revenait, glorieux, de la guerre.

## v) Le soldat revenait de la guerre, glorieux.

ならば Elle est partie, furieuse. も Furieuse, elle est partie. のように前置同格にすることができるとする。Van den Bussche はこのようなケースは前置同格のグループに属し、ほんとうの同格ではないとしている。

## (4) まとめ

同格の定義、および何を同格と認めるかは諸家によってさまざまであり、統一的な見解はない。文法の説明によく用いられる用語であるにもかかわらず、共通の理解が存在しないという珍しいケースと言える。

同格 (*apposition*) の定義の多様性と混乱については次の文献が参考になる。

[1] Neveu, F., *Études sur l'apposition*, Honoré Champion, 1998.

Port-Royal 文法以来の歴史をたどって同格の定義の変遷を跡づけている。

[2] 朝倉季雄「*apposition* について」『フランス文法論』(白水社、1988)

初出は『仏語仏文学研究』no. 3, 1968、中央大学仏語仏文学研究会

[3] *Grand Larousse de la langue française* の« *apposition* »の項目 (Henri Bonnard 執筆)

ここまで検討したことをまとめておこう。

① 次の例のように、下記の条件がそろっているのが典型的な同格である。これに異論を挟む人はまずいない。

a. Paris, (*la capitale de la France*)

フランスの首都パリ

b. Gordes, (*un petit village du département de la Vaucluse*)

ヴォークリューズ県の小さな村ゴルド

《条件》:

i) 二つの名詞句または固有名詞が

ii) ヴィルギュールを挟んで

iii) 同じものの言い換えや補足説明の関係にある (同一指示)

② 伝統文法では二つの名詞がヴィルギュールなしに並置されているものも同格に含めることがある。これを *apposition liée* 「連続同格」と呼ぶことがある。

*le philosophe Platon* 哲学者プラトン、*le poète Hugo* 詩人ユゴー、*l'affaire Dreyfus* ドレフュス事件、*un roman fleuve* 大河小説、*Pépin le bref* ピピン短軀王、*la note do* ドの音、*le verbe coudre* 「縫う」という動詞

しかしこれを同格とすると、*le président Macron* マクロン大統領、*professeur Cohen* コーエン教授、*Jean Dubois* ジャン・デュボワ のような、「肩書き+人名」「名前+名字」の例まで同格に含めなくてはならなくなる。

*Jean, mon meilleur ami* のような典型的な同格では、同格辞 (*mon meilleur ami*) は一段低いイントネーション (*intonation parenthétique*) で発音されるが、上に挙げたような連続同格ではそのような発音は見られない。これは両者が別の構造であることを示している。

③ 同格辞に名詞句以外の品詞を認める場合もよく見られる。

a. *Un chat, immobile, guette une souris.* [形容詞]

ネコは身動きせずネズミを狙っている。

b. *Jean, abattu par la fatigue, resta au lit.* [過去分詞]

ジャンは疲労でくたくたになり寝ている。



c. L'abbé, *en colère*, renvoya le cocher. [前置詞句]

司祭は怒って馭者を首にした。

中には次のような場所を表す語句や時間を表す語句まで同格とする人もいる。

d. Le départemnet de langues romanes, à l'Université de Cologne, en l'année 1930-31, dirigé par Léo Spitzer ne manquait ni de chaleur, ni d'éclat.

(Forsgren, M. « Eléments pour une typologie de l'apposition en linguistique française », *Actes du XVIIIe Congrès International de Linguistique et de Philologie Romanes*, 1991)

レオ・シュピッツァー率いるケルン大学の1930-31年度のロマンス語学科は、熱意に溢れ精彩を放っていた。

Togoby は *Grammaire française* (1982)の中で、同格的に用いられた形容詞・過去分詞は *attribut libre* 「自由属詞」としている。ここでもそれに従い a.~d.は狭義の同格には含めない。

④ 典型的な同格では、同格辞は主名詞の直後に置かれ、前置することができない。

a. Paul, *mon meilleur ami*, m'aidera.

いちばんの親友のポールが手伝ってくれるだろう。

b. \**Mon meilleur ami*, Paul m'aidera

その理由は次のようなものだと考えられる。

i) Paul と *mon meilleur ami* はヴィルギュールで区切られているが、密接に結びついており、一種の複合名詞句のようなものを形成している。このために両者を切り離すことができない。

ii) 多くの研究では、同格辞は *prédicatif* 「叙述的」であり、文中で二次述語 (*prédication seconde*) として働くとしている。

(A) Seul semble pouvoir être reçu comme critère fiable de l'apposition, c'est-à-dire extensible à tous les types de constructions, celui de la prédication seconde marquée par le détachement. (Neveu, *op. cit.*, p. 69)

同格の信頼できる基準としてすべての構文に適用することができるのは、遊離された二次述語という基準だけであるように思われる。

(B) Les appositions sont des relatives réduites ; elles ont un caractère prédicatif.

(Picabia, L. « Article zéro et structures apposée », *Langages* 25, 1991)

同格は省略された関係節である。同格には叙述的性格がある。

「叙述的」「二次述語」ということは、主節より一段程度は低いものの、同格辞は断定されているということである。それは同格が省略された非制限的關係節であるという見解とも合致する。非制限的關係節は主節とは独立に断定を表すからである。

c. Paul, (qui est) *mon meilleur ami*, m'aidera.

「叙述的」ということは、「(ポールは) いちばんの親友だ」と話し手の責任において断定しているということである。また二次述語であるということ、次のような他の二次述語の例と同じく文内で働く要素だということの意味する。

d. Je trouve ce livre *intéressant*. 私はこの本をおもしろいと思う。

e. J'aime le café *chaud*. 私はコーヒーは熱いのが好きだ。

f. Elle est née *riche*. 彼女は金持ちの家に生まれた。

ところが文頭に遊離された語句は、文全体を作用域とする文外の要素である。

g. *En Roumanie, le président est tyran.* ルーマニアでは大統領は暴君だ。

h. *Heureusement, il s'en est sorti sain et sauf.* 幸いなことに彼は無傷で切り抜けた。  
また文頭は主題 (thème) の置かれる位置であり、その意味内容は前提である。

i. *Etant d'origine tropicale, cette plante est résistante à la sécheresse.*

熱帯原産なのでこの植物は乾燥に強い。

したがって前置同格とされる例は、文外要素で前提を表し断定ではないことになる。

j. *Ministre de la culture, Françoise Giroud a été amenée à décorer Jean Renoir.*

文化大臣だったので / 文化大臣だった時に、フランソワズ・ジルーはジャン・ルノワールを叙勲することになった。

このように、いわゆる前置同格は、文内要素であり断定を表すという同格の基準に合わないので、狭義の同格に含めることはできない。ちなみに次のような後置同格は前置が可能なのでこれも同様である。

k. *J'ai été amenée, ministre de la culture, à décorer Jean Renoir.*

私は文化大臣だったので / 文化大臣だった時にジャン・ルノワールを叙勲することになった。

l. *Le livre demeure, compagnon de toute notre vie.* (A. Maurois, *Les livres*)

一生を通じての友であるので、本はずっと留まり消えてなくなることはない。

→ *Compagnon de toute notre vie, le livre demeure.*

## 5. 同格辞の限定詞

### 5.1. はじめに

ここまでの考察を踏まえて、特に断らない限り以下では *Jean, mon meilleur ami* のように主名詞の直後に同格辞が置かれる隣接同格を対象とする。

隣接同格では同格辞は無冠詞のことが多いが、定冠詞・不定冠詞や所有形容詞・指示形容詞などの限定詞が付くこともある。

#### (1) a. [無冠詞]

*Je rentrais dans une demeure connue, celle d'un oncle maternel, peintre flammand.*

(Nerval, *Aurélia*)

私はよく知っている住居に戻った。フランドルの画家である母方の叔父の家だ。

#### b. [不定冠詞]

*Michel de Camaret, un ami de François Métenier, se souvient parfaitement d'une scène pittoresque.*

フランソワ・メトュニエの友人のミシェル・ド・カマレはある印象的な場面をととてもよく覚えている。

#### c. [定冠詞]

*Vous me direz qu'Edgar, le célèbre Edgar de la rue Marbeuf, s'en est allé, lui aussi, s'installer à Genève.*

エドガー、あのマルブフ通りにあった有名な (レストランの) エドガーもジュネーブに引っ越したとあなたは言うかもしれない。

## d. [所有形容詞]

Paul, *mon meilleur ami*, m'aidera.

いちばんの親友のポールが手伝ってくれるだろう。

## e. [指示形容詞]

A l'en croire, François Mitterrand, *cet anticommuniste si ardent*, se serait donc trouvé, à la fin de la IV<sup>e</sup> République, en totale métamorphose, puisqu'il ne s'agissait plus pour lui, cette fois, d'accepter les bulletins des électeurs, mais bien les voix des députés communistes représentant pourtant un appareil honni !

彼の言うことを信ずるならば、熱烈な反共主義者のフランソワ・ミッテランは第4共和制の終わり頃には完全に変身していた。というのもミッテランにとって大事なものは、もはや共産党支持の選挙民の票を得ることではなく、今度は共産党議員の票を得ることだったというのである。共産党議員は忌まわしい装置を代表するというのにだ。

この限定詞の違いは何らかの意味の違いや機能のちがいに対応しているのだろうか。

## 5.2. 先行研究

同格辞の限定詞のちがいに言及した研究は少ない。以下にいくつか紹介しながら考察する。

## 5.2.1. Brunot (1953)

(2) Le rôle de l'article est important dans le cas de l'apposition : *Son oncle, avocat réputé, était intraitable*, signifie que l'oncle a deux qualités ; il est homme de loi, il a de la réputation. Si on dit : *Son oncle, l'avocat réputé...* on cherche à individualiser, au lieu de caractériser, et, à cet effet, on fait appel aux données que possède l'interlocuteur sur la personne dont il s'agit.

(Brunot, F. *La pensée et la langue*, Masson et Cie, 1953, p. 637)

同格において冠詞の役割は重要である。「名高い弁護士の彼の叔父は妥協を知らない人だ」(のように同格辞が無冠詞のとき)は、叔父に二つの属性があることを述べている。叔父は法律家で名高い。もし(同格辞に定冠詞を付けて)「名高い弁護士の彼の叔父は」と言うときは、話し手は叔父さんの属性を述べるのではなく、叔父さんを個別化しようとしている。このために話し手は、聞き手が当該の人物について持っている情報に訴えるのである。

## 【解説】

Brunot は同格辞の冠詞の有無は同格の働きのちがいに対応するとはっきり述べている。*Son oncle, avocat réputé...* のように同格辞が無冠詞のときは、同格には主名詞の指示対象の属性を述べる働きがある。つまり *Son oncle est avocat. / Son oncle est réputé.* というコピュラ文に対応し、同格辞は属詞であり、コピュラ文は記述文である。

一方、*Son oncle, l'avocat réputé...* のように同格辞に定冠詞が付くときは、聞き手が持っている情報を動員して主名詞の指示対象を *individualiser* するよう求めるとして、ここで Brunot が *individualiser* と言っているのは、「この人だ」と特定することであり、同定 *identifier* と言い換えてもよい。「彼の叔父さんというのは、あなたも知っているあの妥協を知らない弁護士ですよ」と述べているので、*Son oncle est l'avocat réputé (que vous connaissez).* という同定文のコピュラ文に対応する。

Brunot の説は既に見た Wagner & Pinchon の説とよく似ている。Wagner & Pinchon は、Paris, capitale de la France のように同格辞が主名詞の単なる言い換えのときはふつう無冠詞で、Pierre, le fils de X「X の息子の方のピエール」のように同格辞が主名詞の指示対象の同定に必要な情報を表すときは定冠詞が付くとしていた。定冠詞に同定機能を認めている点は両者に共通である。

このように Brunot は同格辞の冠詞の有無と意味のちがいを指摘しているが、同格辞が不定冠詞を取る場合と指示形容詞を取る場合には触れていない。

### 5. 2. 2. Tamine (1976)

(3) Tamine, J. « Une discussion de méthode à propos de l'apposition », J.-Cl. Chevalier & M. Gross (eds) *Méthodes en grammaire française*, 1976, Klincksieck.

これはコーパス調査に基づく同格の先駆的研究である。この研究の独自性は、同格辞の語彙的特性によってケースに分けて調査している点にある。以下のそれぞれの場合について、同格辞が i) 無冠詞 ii) 不定冠詞 iii) 定冠詞 iv) 指示形容詞 を付けたときの容認度を調査している。ただし、定冠詞と指示形容詞については、「特殊な意味を伴うときのみ可能」とするに留まっており参考にならない。

以下では同格辞が無冠詞か不定冠詞の場合に限って紹介する。

(A) 同格辞が主名詞の上位概念を表す語彙のとき

*Le coelacanth, un poisson (de l'océan indien), en offre un bon exemple.*

(インド洋の) 魚であるシーラカンスはそのよい実例である。

結果：① 隣接同格は次の場合のみ可能。

*le coelacanth, un poisson (de l'océan indien)...* [不定冠詞]

*le coelacanth, poisson de l'océan indien...* [修飾語付きの無冠詞]

\**le coelacanth, poisson,...*のように修飾語がないと不可。

② 前置同格は無冠詞のみ可能。

*Poisson (de l'océan indien), le coelacanth...*

(B) 同格辞が主名詞の下位概念を表す語彙のとき

*L'animal, un rat (noir), l'avait mordu au pied.*

動物すなわちネズミが彼の足を噛んだ。

結果：① *L'animal, un rat (noir)...*のような不定冠詞付きの隣接同格のみが可能。

② 前置同格は修飾語の有無にかかわらず不可。

\**(Un) rat (noir), l'animal l'avait mordu au pied.*

(C) 同格辞が職業名のとき

*Leur fils, professeur (dévoué), a obtenu les palmes académiques.*

教員をしている彼らの息子がパルム・アカデミック勲章を授与された。

結果：① 隣接同格は冠詞と修飾語の有無にかかわらず可能

*Leur fils, (un) professeur (dévoué), a obtenu...*

② 前置同格は修飾語の有無にかかわらず無冠詞のみ可能。

*Professeur (dévoué), leur fils a obtenu...*

(D) 同格辞が親族名称のとき

Ma voisine, *une grand'mère (de six petits enfants)*, tricote sans arrêt.

お隣さんは孫が6人いるおばあさんで、いつも編み物をしている。

結果：① 隣接同格は冠詞と修飾語の有無にかかわらず可能

Ma voisine, *(une) grand'mère (de six petits enfants)*, tricote...

② 前置同格は無冠詞のみ可能

*Grand'mère (de six enfants)*, ma voisine tricote...

(E) 同格辞が年齢を表す名詞のとき

Le père Goriot, *un vieillard (de 69 ans)*, s'était retiré chez Mme Vauquier.

老人のゴリオ爺さんはヴォーキエ夫人の所に隠居していた。

結果：① 隣接同格は次の場合に可能。

Le père Goriot, *un vieillard (de 69 ans)*, ... [不定冠詞]

Le père Goriot, *vieillard de 69 ans*... [修飾語付きで無冠詞]

② 前置同格は次の場合にのみ可能。

*Vieillard de 69 ans*, le père Goriot... [修飾語付きで無冠詞]

(F) 同格辞が主名詞のメタ言語的言い換えのとき

Le mica noir, *la biotite*, est un minéral très répandu.

黒雲母すなわちバイオタイトはどこにでもある鉱物だ。

結果：① 隣接同格は定冠詞のみ可能

Le mica noir, *la biotite*...

② 前置同格では修飾語が付くときだけ無冠詞で可能。

*Biotite en termes techniques*, le mica noir...

(4) 考察

以上の調査結果から次の点が明らかになる。

① すべての場合において、前置同格が可能なのは無冠詞のときに限られる。隣接同格では無冠詞のときも不定冠詞が付くときも可能なことが多い。したがって前置同格と隣接同格は統語的にかなり異なる構文である。

→ 疑問：なぜ前置同格は無冠詞しか可能でないのか。それは前置同格と隣接同格の構造または機能のちがいによるものなのか。

② 修飾語なしの隣接同格で無冠詞が可能なのは次の場合に限られる。

i) 職業名 *Leur fils, professeur*...

ii) 親族名称 *Ma voisine, grand-mère*,...

それ以外は無冠詞のときは修飾語が必要である。

*le coelacanthé, poisson de l'océan indien*...

コピュラ文の属詞でも職業名や親族名称は無冠詞で現れる。

iii) *Xavier est boulanger*.

グザヴィエはパン屋だ。

iv) *Marie est mère de deux enfants*.

マリーは2人の子の母親だ。

それ以外の名詞では冠詞が必要である。

v) *Le coelacanthé est un poisson de l'océan indien*.

シーラカンスはインド洋に住む魚である。

隣接同格においても、コンピュータ文の場合と同じように、職業名や親族名称は外的属性を表す「ラベル」(étiquette)として機能しやすいことによると考えられる。

③ 同格辞が上位概念のときは、隣接同格も前置同格もできる。

i) *Le coelacanth, poisson...*

ii) *Poisson, le coelacanth...*

同格辞が下位概念のときは隣接同格しかできない。

iii) *L'animal, un rat...*

i) *\*(Un) rat, l'animal...*

→ 「動物、すなわち一匹のネズミが」は、聞き手により詳しい情報を与える言い換えになっている。しかし、「一匹のネズミ、すなわち動物は」は、詳しい意味の語をより漠然とした意味の語で置きかえているので有効な情報の提示になっていないことがその理由だと思われる。「ネズミ」の中には「動物」という意味はすでに含まれている。

④ このことは同格が一般の照応と異なる現象であることを示している。一般の照応であれば、次のように下位概念を上位概念で照応することは可能だからである。

i) *Pierre a visé un cerf, mais l'animal s'est enfui.*

ピエールは鹿に狙いを定めたが、その動物は逃げてしまった。

照応は同一指示関係に基づく反復であり、照応詞が先行詞に含まれていない情報を追加することはできない。次の例では *anglaise* が新しい情報である。

ii) *Une étudiante est entrée dans le café du coin. \*L'étudiante anglaise a commandé un express.*

女子学生が近所のカフェに入って来た。そのイギリス人の女子学生はエスプレッソを注文した。

**N. B.** ただし、指示形容詞を用いた *ce N* 照応では、新しい情報を付け加えることができる。

iii) *Jean a engagé une nouvelle infirmière. Cette Allemande de 30 ans venait de Berlin.*

ジャンは新しく看護師を雇った。この30歳になるドイツ人はベルリン出身だった。

後で見るが、*Picabia* は *un N1, le N2* のように同格が二つ並ぶ場合、*le N2* は *un N1* の照応だと主張しているが、同格と照応はかなり異なる現象であり、その主張は認めがたい。

### 5.2.3. Forsgren (1988)

(5) Forsgren, M. « Apposition nominale : déterminants et ordre des constituants », *Travaux de linguistique* 17, 1988.

同格辞の限定詞と同格辞の語順について最も詳しく分析したのは Forsgren (1988) である。Forsgren は多数の実例の分析に基づいて次のように述べている。

(A) 同格辞が無冠詞の同格について

Voici en revanche quelques exemples du cas-type , où le substantif apposé constitue un prédicat attributif, caractérisant ou typant, portant sur le référent de la base.

[23] Un historien anglais, *spécialiste du second Empire*, confirma la pertinence de

## l'analyse.

以下に挙げるのが典型的な例である。同格辞の名詞は属性的な述語であり、主名詞の指示対象を特徴づけたり分類したりする。

[23] 第二帝政の専門家のあるイギリス人の歴史家が、その分析が妥当であることを確認した。

## 【解説】

同格辞が無冠詞のとき、同格辞は主名詞にたいして「属性的述語」の役割を持つと述べている。このタイプでは特に主名詞が固有名詞のとき、同格辞は肩書きや職業を表すものが多いことが報告されている（長沼 2004）。

i) François Dubet, *sociologue*, explique pourquoi notre système scolaire vit dans un état de crise permanent.

社会学者のフランソワ・デュベはわが国の教育システムがなぜ常に危機的状態にあるかを説明している。

このように無冠詞の同格辞は、主名詞の属性を述べたり (*caractérisant*)、分類したりする (*typant*) はたらきがあるとしている。これはコピュラ文の属詞名詞の持つ役割であり、隣接同格のうち同格辞が無冠詞のものは、その働きがコピュラ文に似ていることを改めて示している。

(B) 同格辞に不定冠詞が付く場合について

En toute généralité d'abord, soulignons que cette structure, dans notre corpus, est plutôt rare. En plus, comme l'avait déjà observé Tamine (1976), elle ne se retrouve en principe jamais à l'ordre **A** (=appositif) + **B** (base). (Ibid.)

まず全体的に見て私のコーパスの中でこのタイプの実例はどちらかと言えば少ない。また Tamine (1976) がすでに指摘しているように、このタイプは原則として **A** (=同格辞) + **B** (=主名詞) の順番で出現することは決してない。

## 【解説】

Forsgren は実例を挙げていないが、同格辞に不定冠詞が付くのは次のような例である。

i) *Ma voisine, une grand'mère de six petits enfants, tricote sans arriêt.* (Tamine 1976)

お隣は孫が6人いるおばあさんで、しょっちゅう編み物をしている。

Forsgren はまず実例の数が少ないこと、そして Tamine (1976) が明らかにしたように、前置同格が不可能なことを改めて指摘している。

ii) *\*Une grand'mère de six petits enfants, ma voisine tricote sans arriêt.*

(C) 同格辞に定冠詞が付く場合について

Comme ce type d'apposition véhicule le plus souvent un prédicat identificatif, il n'est guère étonnant que le groupe le plus fréquent ici soit celui des différents compléments : la plupart du temps, le sujet a été suffisamment identifié par le contexte antérieur, et le besoin d'un prédicat secondaire de type identificatif ne s'installe pas.

[36] Du même coup, un parti « révisionniste », *le RPF*, devait sortir de l'approbation de la Constitution par un tiers des électeurs inscrits. (ibid.)

この型の同格はたいていの場合、同定的な働きをする述語として振舞うので、最もよく見られるのがさまざまな補語であることは驚くにあたらない。ほとんどの場合、主語は先行文脈によって十分に同定されているので、同定的な働きをする二次述語の必要性は低い。

[36] それと同時に、選挙登録した有権者の3分の1による憲法の承認によって、修正主

義的政党の RPR が生まれるはずだった（生まれることになった）。

### 【解説】

同格辞に定冠詞が付くのは補語に多いと言いながら、Forsgren が挙げているのは主語の同格の例ばかりである。[36]では主語 *un parti « révisionniste »*には不定冠詞が付いているのでその指示対象はまだ同定されていない。それを同格辞の *le RPF* が「ある政党すなわち RPF」と同定している。

作例をもとに考えると次のようになると思われる。

#### i) [同格が無冠詞のとき]

*Le projet Artémis a été conçu d'abord par un astrologue américain, inventeur de la télescope spatiale Hubble.*

アルテミス計画は最初に、ハッブル宇宙望遠鏡を発明したアメリカ人の天文学者によって構想された。

→ *un astrologue américain* は不定冠詞が付いているので、聞き手にとって未知の新情報である。*inventeur de la télescope spatiale*は無冠詞なので、主名詞の *un astrologue américain* に属性を付け加えており、これも新情報である。

#### ii) [同格に定冠詞が付いているとき]

*Le projet Artémis a été conçu d'abord par un astrologue américain, l'inventeur de la télescope spatiale Hubble.*

アルテミス計画は最初に、アメリカ人の天文学者によって構想された。その人はハッブル宇宙望遠鏡を発明した人である。

→ 「あるアメリカ人天文学者」とは誰かというと、「ハッブル宇宙望遠鏡の発明者」として知られている人であると同定している。

ただし、この同定は「ハッブル宇宙望遠鏡の発明者」がどの程度一般に知られているかによるので、それほどはっきりした効果があるかはわからない。

### 5.2.4. 大賀・メランベルジェ (1987)

(6) 大賀正喜、G.メランベルジェ共著、大阪日仏センター編『和文仏訳のサスペンス』  
(白水社、1987)

#### 課題9 趙紫陽の訪米

中国の首相として初めて訪米した趙紫陽氏は、16日までに、レーガン大統領との首脳会談をはじめとする全日程を終え、次の訪問国カナダへ向かう。

[大賀正喜訳]

*M. Zhao Ziyang, le premier chef de gouvernement chinois à se rendre à Washington, va maintenant visiter le Canada (prochaine étape de sa tournée dans des pays libres), après avoir terminé, le 16, tout son programme aux Etats-Unis auquel figurait, entre autres, le dialogue avec le président Reagan.*

[G.メランベルジェ訳]

*M. Zhao Ziyang, premier chef de gouvernement chinois à se rendre à Washington, après avoir terminé, le 16, son programme de visite américain qui comportait entre autres une rencontre avec le président Reagan, s'apprête à gagner la prochaine étape de son voyage,*



Ottawa.

**M** *le premier chef de gouvernement chinois* は、私は冠詞 *le* をつけなかったのですが、どちらでもいいんじゃないかな。先生はどう思われますか。何か違いを感じますか。

**大** 別に感じませんね。同格は場合によって冠詞がついたりつかなかったり、不定冠詞がつくこともあります。

**M** たとえば、*Victor Hugo, auteur des « Misérables »* と、*Victor Hugo, auteur des « Misérables »*、同じですね。

**大** ただ、定冠詞をつけると、ご存知の『レ・ミゼラブル』の著者、というニュアンスが出る。

—— つまり、書き手がその情報を読み手にとって既知のものとみなしているわけですね。

**M** そうするとここは、*le* はないほうがいいんじゃないかな。

あまり自信はないのですが、今考えたのは安部外相がフィリピンを公式訪問する、という記事をフランスの新聞に書くとしたらですね。フランス人は日本の外務大臣が誰か、まず知らないと思うんです。こう考えれば私は、*M. Abe, ministre des Affaires étrangères du Japon, se rendra aux Philippines pour une visite officielle.* と書くでしょうね。

—— 無冠詞にすると未知の情報になるわけですね。

**M** そうなんです。*le ministre* と定冠詞をつけると、*comme vous savez* というニュアンスが出るわけです。(…) と、まあ、一応こう考えられるわけですが、私はやはり、ここはそんなに違いを感じないんですよ。(…)

実際にここまで厳密な使い分けをやっているかどうか。でもフランスの新聞に、*M. Mitterrand, président de la République* とは書かないと思うんです。

**大** *le président* でしょうね。 (pp. 134-135)

### 【考察】

Brunot や Forsgren の研究では、同格辞が無冠詞のときは *caractérisant* 「属性を表す」、定冠詞が付くときは *identifiant* 「同定的」としていた。大賀・メランベルジェの対話からは、同格辞の冠詞の有無が果たすもう一つの機能が浮かび上がる。それは聞き手にとって未知の情報か既知の情報をマークするという談話的機能である。

*Victor Hugo, auteur des « Misérables »* のように同格辞が無冠詞のとき、同格辞の表す意味は聞き手にとって未知の情報で、*Victor Hugo, l'auteur des « Misérables »* のように定冠詞が付くときは、同格辞の意味内容は聞き手がすでに知っている情報だといえるのである。

### (7) 庄野潤三『プールサイド小景』を訳す

最初に友人に連れられてこのバアに行った時は、彼は姉の顔をフランス映画の女優で、現世的な容貌に彼岸的な空気を濃く漂わせている M.....に似ていると思った。

[G.メランベルジェ訳]

Quand, entraîné par un ami, il s'y rendit pour la première fois et la vit, il lui trouva une ressemblance avec M..., cette actrice de cinéma française dont le visage mondain s'auréolait d'une indubitable halo mystique.

——「フランス映画の女優」をメランベルジェ先生は *cette actrice de cinéma française* としていらっしやいますが、これはなぜ指示形容詞になっているのでしょうか。

**M** たとえば、定冠詞 *l'actrice de cinéma française* にすると、課題9「趙紫陽の訪米」で議論のあった *Victor Hugo, l'auteur des « Misérables »* と同じことになりますね。皆さんご存知の、という意味が出てくる。指示形容詞の場合は、むしろ、聞き手は知らないんです。

**大** アレッ、逆だと思っていた。つまり先生は、話し手だけが知っている、ということ *cette* にされたんですか。

**M** そうなんです。話し手が自分の判断だけでそう言っているわけです。一般的にはそうじゃないかもしれない。

—— 限定詞をとり払ったら、どういうニュアンスになるんですか。

**M** ウーン、そうするとね、面白いことになっちゃうんですよ。つまり、無冠詞は科学的に、客観的に述べる形なんです。今から発表します、という感じなんです。

**大** 新しい情報になるんですね。

**M** そして、事実になるわけです。 *actrice de cinéma française* は事実でいいのだけれども、それに続く *dont le visage mondain...* が事実かどうかの問題じゃないでしょう。話し手が自分の考えを述べているだけで、客観性がない。無冠詞にすると客観的に述べることになるわけです。指示形容詞にすると話し手の主観になるんですね。定冠詞では、皆がそう思っている。 *rappel* になるわけです。

**大** ただ、 *cette* の場合も「ほら、あれだよ」というふうに、聞き手も知っているだろうと考えてるんじゃないですか。

**M** そんなふうに聞こえるんですね。でも、「知っているだろう」なんです。実際は知らないんです。

**大** つまりね、突き詰めて考えると、定冠詞も客観的に聞き手が知っているかどうかではなく、聞き手が知っている *と* 話し手がみなす、ということなんです。そういう意味では定冠詞も主観的なんですね。指示形容詞はそれを強めて「ほら、あれだよ」と言ってるだけなんじゃないですか。

**M** 話し手の主観を強く出すために *cette* と言っているわけで、定冠詞ならその主観性は出ないんです。(…) しかし、 *Victor Hugo, l'auteur des « Misérables »* と *Victor Hugo, cet auteur des « Misérables »* は、やっぱり違いますよ。指示形容詞にすると何か特別な意味が出てくる。何が出てくるのかな…。

**大** 「あの有名な」 *Victor Hugo* というニュアンスが出るんじゃないですか。

**M** そうなんです、その場合、指示形容詞にすると、 *Victor Hugo, cet auteur des « Misérables » que tout le monde connaît* とか、何か続くものが要るんです。アッ、そうか。 *auteur des « Misérables »* だけだったら指示形容詞はありえないんです。定冠詞なら *Victor Hugo, l'auteur des « Misérables »* で止められる。ここがキーポイントなんじゃないかな。

**大** なるほど。指示形容詞を使うときにはさらに説明が要る。(…)

—— そういう説明が要ることと指示形容詞の主観性とは、関係があるんじゃないですか。自分はそう思う、と強調している。

**M** そうということですね。その説明は関係節に限らず、avec M...., cette actrice de cinéma française connue dans le monde entier とか、形容詞でもいいわけで、とにかく何か要るんです。  
(ibid. pp. 246-249)

### 【まとめ】

対話を進めるうちに意見が少し揺らいでいるが、まとめると次のようになる。

- ① M...., l'actrice de cinéma française のように定冠詞を使うと、同格辞は既知情報を表し、「誰もがご存知の」というニュアンスが出る。
- ② これに対して指示形容詞を使って M...., cette actrice de cinéma française とすると、「ほら、あれだよ」と聞き手も知っているように聞こえるかも知れないが、実際には聞き手にとって未知の情報を表す。
- ③ 定冠詞はみんな知っていることの喚起 (rappel)だが、指示形容詞は話し手の主観を表す。指示形容詞を使った場合、actrice de cinéma française までは事実であっても、それに続く関係節 dont le visage mondain s'auréolait d'une indubitable halo mystique の内容は事実というより話し手の主観に属する。
- ④ 定冠詞を使ったときは M...., l'actrice de cinéma française で止めることができるが、指示形容詞を使うときは M...., cette actrice de cinéma française で止めることができず、その後続く説明が必要となる。

### (8) 周知の指示形容詞との類似点と相違点

上に見たような同格辞に指示形容詞が付くケースは、いわゆる周知の指示形容詞 (démonstratif de notoriété) とよく似たところがある。

a. Il y avait sur la cheminée, entre les candélabres, deux de *ces* grandes coquilles roses où l'on entend le bruit de la mer quand on les applique à son oreille.

(Flaubert, *Madame Bovary*)

暖炉の上の燭台の間には、耳に押し当てると潮騒の音が聞こえるという (あの) 大きな桃色の貝がふたつ置かれていた。

b. Nous nous détournerions de nous comme de *ces* personnes avec qui on a été liés mais qu'on n'a pas vues depuis longtemps. (Proust)

以前は親しかったが長いこと会っていない人たちから心が離れていくように、私たちは自分自身から目を背ける場所だった。

周知の指示形容詞と指示形容詞による同格には、次のような類似点がある。

- ① どちらも〈指示形容詞＋名詞〉だけでは用いることができず、その後に関係節などを付けなくてはならない。
- ② どちらにも「誰もが知っているあの～」というニュアンスがある。  
しかし相違点もある。
- ① 周知の指示形容詞では複数形を取ることが多い。一方、同格辞の指示形容詞は単数形も多く見られる。
- ② 周知の指示形容詞では、〈ces N qui...〉が表す指示対象は総称的か一般性もあるものとされる (井元 2000, Gary-Prieur 2001)。一方、同格辞の指示形容詞では個別のものほとんどである。

上に引いた文章でメランベルジェは、cette actrice de cinéma française dont...のように

同格辞に指示形容詞が付いているとき、聞き手も知っていることであるように見えながら、実は聞き手の知らない話し手の主観的な判断を表すと述べていて、とてもわかりにくい。実はこのことは周知の指示形容詞についてすでによく論じられていることである。

(9) 周知の指示形容詞の周知性はレトリックである

(1) Ne vous attendez pas à trouver en France *ces* jardins pittoresques qui entourent les villes manufacturières de l'Allemagne, Leipsig, Francfort, Nurnberg, etc.

(Standhal, *Le Rouge et le Noir*)

ライプチヒやフランクフルトやニュールンベルクといったドイツの工業都市の周辺にある、あの絵のような庭園が、フランスにもあると思ったら、大違いである。

(2) Pour arriver à la considération publique à Verrières, l'essentiel est de ne pas adopter, tout en bâtissant beaucoup de murs, quelque plan apporté d'Italie par *ces* maçons, qui au printemps traversent les gorges du Jura pour gagner Paris. (Ibid.)

ヴェリエールでみんなから尊敬されようと思ったら、石垣をたくさん築くことはもちろんだが、それにしても、春になるとジュラの谷を通過してパリに出かけていく例の石工たちが、イタリアからもってくる設計などを絶対に採用しないことが肝心である。

(1) (2)における周知性は多分に修辭的なもので、言及されている *jardins pittoresques* や *maçons* が必ずしも実際に著名なものである必要はない。書き手がこれらの対象を「あたかも周知のものであるかのように」扱っているにすぎず、そうした含意を *ces* が醸し出していると見るべきであろう。

(井元秀剛「指示性と周知性の関連について — 「あの N」と *ce* N をめぐる対照言語学的考察」『フランス語学研究』34号、2000)

(10) 周知の指示形容詞のレトリック性

では、聞き手は周知の *Ce* N の指示対象を同定することができるのか、言い換えれば、聞き手は指示対象を自分のデータベース領域に見つけられるのだろうか。用例には指示対象が比較的良好に知られたものもあるが、周知の *CE* の本質は相手の知らないことをあたかも周知のように示す一種のレトリックである。したがって、一見矛盾するようだが、この用法には「擬似的データベースの中の百科事典的知識に指示対象を検索するよう指令を出しながら、その実、新しい指示対象を作り出す」という逆接的な効果がある。

(小田涼「周知の指示形容詞をめぐって」『フランス語学研究』37号、2003)

### 5.2.5. 東郷 (1991a)

東郷雄二「《L'anaphore, cet obscur objet de recherche》— フランス語の〈指示形容詞 *CE* + 名詞句〉照応」『人文』37集、1991、京都大学教養部。

(11) この研究では次のような点を主張している (まとめ)。

定冠詞を用いた非忠実照応には2つのタイプがある

a. un bœuf 「牛」 → le quadrupède 「四足獣」のように、下位概念を上位概念で照応するもの

b. Ton frère est arrivé hier ; l'époux de Jeanne avait manqué tous les tirs. 「君の兄は昨日

着いた。ジャンヌの夫は一発も当たらなかった」のように、*ton frère = l'époux de Jeanne* の同一指示が言語外的知識に依存しているもの

しかし指示形容詞を用いた非忠実照応にはこのような制約はなく、言語外的知識も必要ない。

c. *Où est ma fille ? Où donc a passé cette vermine ?*

娘はどこだ。あの穀潰しはどこに行ったのだ。

このため指示形容詞を用いた同格は、しばしば意味のよく知られていない単語の説明に用いられる。

d. *Les zaïbatsus, ces conglomérats dominant l'économie japonaise n'ont d'yeux que pour l'électrique, les machines outils...*

日本経済を支配している複合企業体である財閥は、電気産業や工作機械しか視野に入っていない。

このように指示形容詞を用いた照応は、先行文脈にある情報に依存しそれを反復するだけでなく、新たな情報の提示を行なっている。これを踏まえて指示形容詞による照応の機能を次のように定義した。

CE+名詞句は、先行文脈中の名詞句や文脈の内容を、文脈内の意味関係を含めて受け、それを対象として、発話主体の視点から、(再)定義・性格づけ・判断・評価などを行なう機能がある。

そして小説とその日本語訳を検討し、フランス語の〈CE+名詞〉による照応が、日本語訳では「これはNだ」という話し手の判断として訳されていることを見た。

e. *Réfléchissez, ma petite mignonne. Ce secret restera entre nous.*

まあ、よく考えてごらん。これは二人だけの秘密にしておくんじや。

f. *Il fallait penser et agir vite. Bientôt tous seraient au courant, dans cet univers étrangement clos et réduit.*

早く対策を考えなくては。そして、早く行動しなければならない。船は、ごく狭い、閉ざされた世界だ。事はたちまちみなに知れ渡るにちがいない。

このことは、*ce N* の背後には *C'est un N.* という話し手の判断が隠れているという Kleiber の指摘とも符合する。

cf. Kleiber, G., « Sur la sémantique des descriptions démonstratives », *Linguisticae Investigationes* VIII, 1984.

### 5.2.6. 東郷 (1991b)

東郷雄二「Y. Kawabata, auteur de « Kyoto », ou Y. Kawabata, l'auteur de « Kyoto » 『フランス語学研究』25号、1991.

この短い語法ノートで東郷は、無冠詞の同格は聞き手にとって未知の情報を、定冠詞の同格は既知情報を表すという大賀・メランベルジェ (1987) を紹介し、それに次の点を付け加えている。

① 談話の中で同格名詞句の重要度が高いときは定冠詞が付き、それほど高くないときは無冠詞のことが多い (= 主題性の高さ)。

- a. « Et la plupart d'entre eux n'acceptent pas non plus de travailler sous les ordres d'une femme », explique Noriko Nakamura, *présidente de l'Association japonaise des femmes cadres*.

「そして大部分の男性は女性に命令されて働くのも受け入れません」と女性経営者連合会会長の中村典子は言う。

- b. ... le président de TF1, et Jacques Lehn, *le vice-PDG d'Europe 1* et successeur d'Yves Sabouret à la direction générale de Hachette, sont les hôtes,...

TF1 の社長と、Europe 1 の副社長で、アシェット社の経営トップであるイブ・サブーレの後継者ジャック・レンが今夜のお客様です。

- ② 無冠詞の同格辞は主名詞の客観的・辞書的言い換えであることが多い。この条件に当てはまらないときは不定冠詞が必要になる。

- c. ... ce qu'elle appelle « joue-bis », *une prolifération de cellules qui la livre pour dix ans aux chirurgiens et aux radiothérapies*.

彼女が「第二の頬」と呼ぶのは、癌化した細胞の増殖で、彼女はこのため 10 年にわたって外科手術と放射線治療を受けることになる。

- ③ 指示形容詞の付く同格辞は、客観的な言い換えや定義ではなく、主観的なコメントを含んでいる。

- d. Qu'est-ce qu'un chercheur qui passe sa journée à décortiquer des cellules nerveuses de crabe pourrait me dire d'original sur mon angoisse existentielle, *cette boule au creux de l'estomac et cette patte d'ours qui m'écrase la nuque ?*

一日中カニの神経細胞をつつき回している研究者が、私の存在論的苦悩についてどんな独創的な意見を述べることができるだろう。胃に重くもたれるこのかたまり、私の衿首を押し潰そうとするこの熊の手について。

### 5.2.7. 中尾 (1996)

中尾和美「同格における冠詞について」『フランス語学研究』30号、1996.

この研究では次の点が主張されている。

- ① 大賀・メランベルジェ (1987)の指摘のように、無冠詞の同格辞は未知の情報を、定冠詞付き同格辞は既知の情報を表す。これは、無冠詞名詞句は非個体を表し、属性を記述するのにたいして、定冠詞付き名詞句は個体を表して、先行名詞句を同定するためである。

- ② 不定冠詞付きの名詞句も個体を表し、先行する名詞句を同定することができる。また un N は「N という集合の一要素」を表すので、un parmi d'autres 「多数の中の一つ」という意味合いを持つ。次の無冠詞の同格辞を不定冠詞付きに変えると、軽蔑的なニュアンスが生じるのはそのためである。

- a. Finalement, c'est Jacques Chirac, *lecteur enthousiaste de son bouquin « Chers Compatriotes » (J.-C. Lattès)*, qui a partagé ses analyses.

最終的に彼の分析と同じ見解を示したのは、彼の著書『親愛なる同国人たち』の愛読者であるジャック・シラクである。

- ③ 無冠詞の同格辞が主名詞の属性を比喩的に提示するときは、不定冠詞を付けること

ができない。un N とすると個性が生じるためである。

b. Irina Slutskaya, *poupée russe au teint de lait*, initiée au patinage lorsqu'elle n'était encore qu'une enfant malingre,...

まだ虚弱な子供だった頃にスケートを始めた乳白色の肌の人形のようなイリナ・スルツカヤ

④ 比喩的な言い換えは無冠詞の同格でもできるので、話し手による新たな価値づけを表すのは、指示形容詞を用いた同格の一人舞台とは言えない。

### 5. 2. 8. Picabia (1991)

Picabia, L. « Article zéro et structures apposées », *Langages* 25, 1991.

(1) Picabia はこの論文で同格の性質を次のように示している。ただし、本論文で考察の対象となっているのは隣接同格のみで、前置同格は含まれていない。

(A) 同格は名詞句と名詞句が隣接して生じるものである。

→ Claire, *ahurie*, resta sans mot dire. 「クレールは啞然として言葉が出なかった」のような遊離形容詞は同格に含めない。

(B) 同格辞は主名詞との同一指示を通じて文の意味に参画する。したがって絶対構文のように、主名詞とは別に独自の指示対象を持つものは同格に含めない。

a. Jean, *les mains derrière le dos...* (Grevisse)

ジャンは両手を背に回して…

(C) 同格は省略された関係節である。同格は叙述的な (prédicatif) な働きを持つ。

b. L'hirondelle, (*qui est*) *messagère du printemps*, ... (Grevisse)

春を告げる使者であるツバメは…

(D) 同格は être が省略されたコピュラ文である。したがって同格辞は属詞 (attribut) の機能を持つ。

(E) 無冠詞の同格辞は espèce を表す。

N. B. Picabia は Wagner & Pinchon (1964) が述べたこととしているが、該当する箇所が見当たらない。ここで espèce というのは内包とほぼ同じ意味かと思われる。

(2) Picabia は同格辞の限定詞の問題にも触れ、興味深いデータを提示している。以下の例の#記号は、非文法的というわけではなく、談話の流れが不適切 (mauvais enchaînement) であることを示すという。

a. i) #Gilbert, *cyclone*, a dévasté Jamaïque. [無冠詞で修飾語なし]

サイクロンのジルベールはジャマイカに被害をもたらした。

ii) Gilbert, *un cyclone*, a dévasté Jamaïque. [不定冠詞]

サイクロンのジルベールはジャマイカに被害をもたらした。

iii) Gilbert, *cyclone de force maximale*, a dévasté Jamaïque. [無冠詞で修飾語あり]

最大級の勢力のサイクロンのジルベールはジャマイカに被害をもたらした。

b. i) #Jean, *médecin*, suit la petite Delphine. [無冠詞で修飾語なし]

医者ジャンはデルフィーヌをずっと治療している。

ii) Jean, *un médecin*, suit la petite Delphine. [不定冠詞]

医者ジャンはデルフィーヌをずっと治療している。

iii) #Jean, *médecin de Paul*, suit la petite Delphine. [無冠詞で修飾語あり]

ポールのかかりつけ医のジャンはデルフィーヌをずっと治療している。

iv) Jean, *médecin généraliste / médecin préféré de Paul*, suit la petite Delphine.

[無冠詞で修飾語あり]

一般医の / ポールのお気に入りの医者ジャンはデルフィーヌをずっと治療している。

c. i) #Albertville, *station de ski*, vit dans la fièvre. [無冠詞で修飾語なし]

スキー場のアルベールビルは沸き立っている。

ii) Albertville, *une station de ski*, vit dans la fièvre. [不定冠詞]

スキー場のアルベールビルは沸き立っている。

iii) Albertville, *station de ski de Haute Savoie*, vit dans la fièvre.

[無冠詞で修飾語あり]

オート・サヴォワ県のスキー場のアルベールビルは沸き立っている。

### 【考察】

上のデータは次のことを示している。

- ① 同格辞が修飾語のない普通名詞のとき、無冠詞は容認度が低く、不定冠詞は容認度が高い。
  - ② 同格辞が *médecin de Paul* のように分類的でなく、特定の個体を表すときは定冠詞が必要である。  
N. B. 例は挙げられていないが、Jean, *le médecin de Paul*, suit la petite Delphine. は適格である。
  - ③ 同格辞にサブクラスを表す分類的な修飾語が付いているときは無冠詞でも適格になる。
- (3) Picabia は同格が無冠詞のとき修飾語が必要なことを説明するために、次のような存在を表す *exister* の非人称構文の制約と比較している。

a. i) #Il existe des Français.

フランス人が存在する。

ii) Il existe des Français de vieille souche.

古い家系のフランス人が存在する。

b. i) #Il existe des cyclones.

サイクロンがある。

ii) Il existe des cyclones de force maximale.

最大級の勢力のサイクロンがある。

Picabia の説明は次のとおり。Français、cyclone という単語があるということは、それが指示する対象が存在するということである（存在前提がある）。il existe という非人称構文を用いてその存在を重ねて言明するのは矛盾する。このため容認度が低い。

しかし「古い家系のフランス人」「最大級の勢力のサイクロン」はそれぞれ「フランス人」「サイクロン」のサブクラスを表すので、その存在を言明するのは矛盾にはならない。この意味解釈のメカニズムは同格の場合も同じであると考えられる。だから同格にも同じように、サブクラスを表す分類的な修飾語が必要なのである。



いちおう筋の通った説明のように見えるが、なぜ同格に非人称と同じ制約があるのか不明であり、さらに考察が必要である。

(4) Picabia は上の考察をもとにして同格の意味論的解釈は次のようなものだとする。

a. Dupont, *Français de vieille souche*,...

古い家系のフランス人であるデュポンは...

同格辞の *Français de vieille souche* は集合 (クラス) を表す。主名詞の Dupont は、集合に属する一要素の変数 x に該当する特定の値を表す。

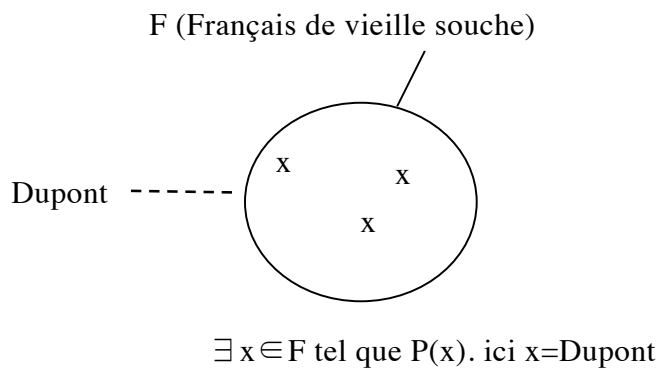
【考察】

同格が être が省略されたコピュラ文だとすると、次のような言い換えができる。

i) Dupont est un Français de vieille souche.

デュポンは古い家系のフランス人である。

この言い換えでは属詞に不定冠詞が必要で、不定冠詞 un は「古い家系のフランス人」という集合への帰属 (attribution) を表し、Picabia の主張と合致するようにも見える。しかし問題にしている同格は無冠詞で、集合への帰属を表す不定冠詞はないので何かおかしい。Picabit は次のような図を提示している。



(5) 同格は複数連続して生じることができるとするが、その場合、無冠詞と不定冠詞付きと定冠詞付きの組み合わせでは、次のちがいがあるとする。

a. [無冠詞] + [無冠詞]

Albertville, *future capitale des Jeux Olympiques, station de ski de Haute Savoie*, vit dans la fièvre.

次のオリンピック開催地でオート・サヴォワ県のスキー場のアルベールビルは沸き立っている。

→ 二つの同格辞は対等の関係で主名詞の属性を表す。図式的には次のように表すことができる。(Picabia がそう書いているわけではない)

Albertville est la future capitale des Jeux Olympiques

et

Albertville est une station de ski de Haute Savoie.

b. [定冠詞] + [不定冠詞]

Albertville, *la future capitale des Jeux Olympiques, une station de ski de Haute Savoie*,

vit dans la fièvre.

→ 一つ目が定冠詞で二つ目が不定冠詞のときは、二つ目の同格辞は次のように一つ目に従属する。

...la future capitale des Jeux Olympiques qui est une station de ski de Haute Savoie

c. [不定冠詞] + [定冠詞]

Albertville, *une station de ski de Haute Savoie, la future capitale des Jeux Olympiques*, vit dans la fièvre.

オート・サヴォワ県のスキー場で次のオリンピック開催地のアルベールビルは沸き立っている。

→ 一つ目が不定冠詞で二つ目が定冠詞のとき、二つ目の同格辞は一つ目の同格辞の照応である。次の場合と同じである。

J'ai heurté un camion. {L'engin / Le camion } m'a défoncé l'aile gauche.

私はトラックと衝突した。{その車は / トラックは} 私の車の左側のフェンダーを凹ませた。

### 【考察】

a.のように無冠詞の同格が並ぶ場合、両者が対等の関係にあるというのは正しいと思われる。

しかし b. のように [定冠詞] + [不定冠詞] の連続のとき、二つ目の同格は一つ目に従属するというのは問題である。もしこう考えると、*une station de ski de Haute-Savoie* は *Albertville* と同格なのではなく、*la future capitale des Jeux Olympiques* と同格だということになってしまう。これは次のように二つの同格を意味を変えずに *et* で等位接続することができるということと矛盾する。等位接続した場合、全体が *Albertville* と同格になるからである。

i) *Albertville, la future capitale des Jeux Olympiques et une station de ski de Haute Savoie*, vit dans la fièvre.

やはり [定冠詞] + [不定冠詞] の連続でも二つの同格は主名詞にかかっていると見なすべではないだろうか。

c.のように [不定冠詞] + [定冠詞] と並ぶとき、定冠詞付きの同格辞が不定冠詞付きの同格辞の照応だというのは、次のような問題がある。

① 照応は指示的もしくは特定解釈の名詞句のあいだで成り立つ関係である。Picabia の挙げている次の例では *un camion* は特定の個体を表し、*Le camion* はそれと同じ指示対象を指す

i) J'ai heurté un camion. *Le camion*....

もし問題の文で *une station de ski de Haute Savoie* と *la future capitale des Jeux Olympiques* のあいだで照応関係が成り立つならば、*une station de ski*...は特定の個体を表し、*la future capitale*...はそれと同一指示のはずである。Picabia (2000)でも次のように同じ趣旨のことを述べている。

Les appositions entretiennent avec leur antécédent des relations anaphoriques analogues à celles d'un anaphorique à son antécédent. (Picabia 2000 : 86)

同格は先行詞と、照応詞と先行詞の関係によく似た照応関係を持つ。

② Albertville, *une station de ski de Haute Savoie*,...の同格は属詞 (attribut) の役割を持つとされているので、次のように être のコピュラ文に書き換えることができる。

ii) Albertville est une station de ski de Haute Savoie.

アルベールビルはオート・サヴォア県のスキー場である。

ところが属詞 *une station de ski de Haute Savoie* は、特定の個体を表さず、[station de ski de Haute-Savoie]という集合の任意の個体を表す。このためコピュラ文の属詞は照応詞の先行詞となることができない。

iii) Albertville est une station de ski de Haute Savoie. \*Celle-ci ...

アルベールビルはオート・サヴォア県のスキー場である。このスキー場は…

iv) Alain Delon est une vedette de cinéma française. On {le / \*la} voit jouer dans beaucoup de films des années 60-70.

アラン・ドロンはフランス映画のスターである。60年代から70年代のたくさんの映画に出演している。

③ 5.2.2. Tamine (1976) の (4) ④で述べたように、le N による照応では先行詞に含まれていない新情報を表すことができない。ところが問題の同格の連続では、二つ目の le N が一つ目の un N に含まれていない情報を表している。ここからもこれは照応ではないと考えるべきである。

### 5.2.9. Picabia (2000)

Picabia, L. « Appositions nominales et déterminant zéro : le cas des appositions frontales », *Langue française* 125, 2000. 特集 Nouvelles approches sur l'apposition

(1) Picabia はこの論文で、前置同格は限定詞を一切受け付けないが、隣接同格は冠詞を付けることができるとし、隣接同格で冠詞ありとなしの間には次のような意味の差があるという。

a. [無冠詞]

Françoise Giroud, *ministre de la culture*, a été amenée à décorer Jean Renoir.

文化大臣のフランソワーズ・ジルーはジャン・ルノワールに叙勲することになった。

b. [定冠詞]

Françoise Giroud, *le ministre de la culture*, a été amenée à décorer Jean Renoir.

→ b.では F. ジルーが現在の文化大臣であることを含意するが、a.にはそのような含意はない。

c. [無冠詞]

Nicolas Burtin, *skieur dilettante*, est désormais leader à temps plein de l'équipe de France.

アマチュア・スキーヤーであるニコラ・ビュタンはこれからフルタイムでフランスチームの監督を務める。

d. [不定冠詞]

Nicolas Burtin, *un skieur dilettante*, est désormais leader à temps plein de l'équipe de France.

→ d.では「アマチュアのスキーヤーである」こととフランスナショナルチームの

監督になるということの間に意味的な齟齬がある。c.にはそのようなものはなく、「アマチュアのスキーヤーであるにもかかわらず」という称賛のニュアンスがある。

(2) 前置同格でも隣接同格でも、同格辞が冠詞なしの普通名詞で修飾語を伴わないときは容認度が低い。

a. \**Plombier, Paul a réparé la citerne en un tour de main.*

水道屋のポールは水槽をあっという間に修理した。

b. \*?*Paul, plombier, a réparé la citerne en un tour de main.*

しかし前置同格では、次の例の *enfant* のように、時間的な位置づけをする名詞の場合に限り許容されるという。*Picabia* もそれ以上説明していないが、興味深い現象である。

c. *Enfant, Marie faisait des cauchemars.*

子供のときマリーはよく夢にうなされた。

## 6. まとめ

うまくまとめることが難しいテーマだが、次のことを確認しておこう。

① 何を同格と認めるかについて、諸家の意見はまちまちで定説はない。次のようなグループがある。

a. 同格を狭く捉える立場

同格は [名詞 1] と [名詞 2] の間で言い換えや説明を行うものである。

i) *Emmanuel Macron, président de la République*

共和国大統領エマニュエル・マクロン

この立場から見れば、上の例のような隣接同格のみが真の同格となる。次のような前置同格は、時や理由・原因などを表す従属節（分詞節）の一部が省略されたもので、真の同格とは見なせない。

ii) *Enfant, je croyais en l'existence réelle du Père Noël.*

子供の頃、私はサンタクロースがほんとうにいるのだと信じていた。

b. 同格をより広く捉える立場

二つの名詞の言い換え関係だけでなく、ヴィルギュールを挟んで名詞を何らかの意味で修飾する機能を果たしていればそれを同格と認める。

iii) *La foule, indignée, protesta.* 群衆は憤激して抗議した。

**N. B.** この場合も同格辞 *indignée* は *prédicatif*「述語的」、*attributif*「属詞的」で、..., *qui était indignée*, ... という非制限的關係節に書き換えられるという同格の定義の一部は満たしていることに注意。

iv) *Elle partit, fuyeuse.* 彼女は激怒して立ち去った。

この立場から見れば、ii)のような前置同格も主語名詞句を修飾していることになるので、同格に含める人が多い。

② 前置同格は必ず無冠詞であり、限定辞が付くことはない。

i)  $\{\emptyset / *Une / *La / *Cette\}$  *Voiture extraordinaire, la 2CV m'a transporté tout autour du monde.* 驚くべき車である 2CV は私を世界中どこでも連れて行ってくれた。

一方、隣接同格は、無冠詞・定冠詞・不定冠詞・指示形容詞などさまざまな限定

詞が可能である。

ii) Jacques Lacan, *psychanaliste* 精神分析学者ジャック・ラカン

iii) Paris, *la capitale de la France* フランスの首都パリ

iv) Yves Sandel, *un ami de François Mitterrand*

フランソワ・ミッテランの友人のイヴ・サンデル

v) *la vie, ce mystère éternel* 生命という永遠の神秘

なぜ前置同格は無冠詞しか許容しないのに、隣接同格はさまざまな限定詞が使えるのか説明が必要である。

③ 前置同格では、同格に置くことができるのは主語に限られる。

i) *Ame solitaire, voyageur infatigable*, Lorenzo Lotto n'obtint jamais la renommée d'un Titien ou d'un Raphaël, ses contemporains.

孤独な魂の持ち主で疲れを知らない旅人であるロレンツォ・ロットは、同時代のティティアンやラファエルのような名声を得ることはなかった。

ただし Picabia (2000)は、与格補語を取る非人称構文や心理動詞では、主語以外のものと同格に置けると指摘している。

ii) *Assistante dans le film où j'ai fait sa connaissance, Education de Prince*, il m'appartenait de le [=Jouvet] réveiller au moment opportun.

私が撮影助手をしていた『王子の教育』という映画で彼と知り合ったのだが、彼（ルイ・ジュージェ）をほどよい時間に起こすのが私の役目だった。

iii) *Correcteur professionnel, toute coquille dans un livre l'exaspère*.

プロの校正係なので、彼（女）は本のどんな誤植にも激しく苛立つ。

隣接同格は主語以外の文要素でも可能なのに、なぜ前置同格は主語としか同格にならないのかは説明を要する問題である。

④ 前置同格は主語名詞句の純粋な言い換え・説明であることは稀で、多くは時・理由・原因などの従属節（分詞節）の意味を担うことが多い。Picabia (1991)は次のような例を挙げている

i) *Officier*, Alfred de Vigny connut l'ennui.

将校だった時にアルフレッド・ド・ヴィニーは退屈というものを知った。

ii) Alfred de Vigny, *officier*, connut l'ennui.

Picabia によれば、i) は時の副詞節として働き、ii) はあまり繋がりがよくないという。隣接同格は主名詞の言い換えとして働くためだと思われる。

なぜ前置同格が副詞節の働きをすることが多いのかは、同格を離れて文頭要素の談話的機能を考えなくては説明できないだろう。Combettes, B., « L'apposition comme unite textuelle et constituant phrastique : approche diachronique », *Langue française* 125, 2000.が参考になる。

⑤ 隣接同格ではさまざまな限定詞が使えるが、次のようなちがいが指摘されている。

a. 無冠詞は客観的で辞書的な言い換え

« Phèdre », *tragédie de Racine* ラシーヌの悲劇『フェードル』

b. 無冠詞は新情報を表す

Carlos Menem, *père du miracle argentin*

アルゼンチンの奇跡の立役者カルロス・ムネム

c. 定冠詞は旧情報を表す

Victor Hugo, *l'auteur des « Misérables »*

『レ・ミゼラブル』の作者ヴィクトル・ユゴー

d. 指示形容詞は主観的評価を表す

la Securitate, *cette formidable machine à broyer l'esprit de résistance des Roumains*

セキュリティット、ルーマニア人の抵抗精神を粉々にする恐るべき装置

不定冠詞についてはあまり記述がない。

e. « Phèdre », *une tragédie de Racine*

(L'article isole *Phèdre* parmi les tragédies de Racine)

(Chevalier et al. *Grammaire Larousse du français contemporain*, Larousse, 1964)

(不定)冠詞は『フェードル』をラシーヌの多くの悲劇の一つとして抜き出す。

## 【参考文献】

### 1. 文法書など

[1] 朝倉季雄『新フランス文法事典』白水社、2002.

[2] 目黒士門『現代フランス広文典』白水社、2015.

[3] Brunot, F., *La pensée et la langue*, Masson et Cie, 1953.

※ Chapitre II Les constructions de l'épithète (pp. 636-637)で短く同格に触れており、冠詞ありと冠詞なしのちがいに言及している。

[4] Damourette, J. & E. Pichon, *Des mots à la pensée*, d'Artrey, 1930-1950.

※ § 476, 477, 491 で同格を取り上げて論じている。

[5] *Le Bon usage*, 12<sup>e</sup> édition, Duculot, 1991.

※ Chapitre IV La subordination の中で apposition を論じている (pp. 552-563)。用例が豊富。

[6] *Grand Larousse de la langue française* (7 volumes) の« apposition »の項目

※ Henri Bonnard 執筆で歴史的展望も含めて手際よく解説されている。

[7] Wagner, R.L. & J. Pinchon, *Grammaire du français classique et moderne*, Hachette Université, 1977.

※記述の量は多くないが、見るべき見解が少なからずある。

### 2. 同格についての研究論文

[8] 朝倉季雄「apposition について」『フランス文法論』（白水社、1988）

（初出は『仏語仏文学研究』no. 3, 1968、中央大学仏語仏文学研究会）

[9] Combettes, B. « L'apposition comme unité textuelle et constituant phrastique : approche diachronique », *Langue française* 125, 2000.

※同格のテキスト機能を論じている珍しい研究だが、方向性に疑問があり取り上げない。

[10] Forsgren, M. « Apposition nominale : déterminants et ordre des constituants », *Travaux de linguistique* 17, 1988.

※同格の分類を試みており、まず読むべき基本文献。

[11] Forsgren, M. « L'adjectif et la fonction d'apposition », *L'Information grammaticale* 58,

1993.

[12] 中尾和美「同格における冠詞について」『フランス語学研究』30号、1996.

[13] 長沼圭一『フランス語における有標の名詞限定の文法』早美出版社、2004.

※第2章「同格として現れる無冠詞名詞句」で論じている。

[14] Neveu, F., *Études sur l'apposition*, Honoré Champion, 1998.

※同格についての大部の本なのだが、読んで参考になることがあまりない。

[15] Neveu, F. « Quelle syntaxe pour l'apposition ? Les types d'appariement des appositions frontales et la continuité référentielle », *Langue française* 125.

[16] Picabia, L. « Article zéro et structures apposées », *Langages* 25, 1991.

※今回いちばん参考にした論文だが、主張には疑問点も多くある。

[17] Picabia, L. « Appositions nominales et déterminant zéro : le cas des appositions frontales », *Langue française* 125, 2000.

※コピュラ文の属詞の無冠詞と合わせて論じており、参考になる点も多々あるが、疑問を感じる点も少なくない。

[18] Tamine, J. « Une discussion de méthode à propos de l'apposition », J.-Cl. Chevalier & M. Gross (eds) *Méthodes en grammaire française*, 1976, Klincksieck.

※同格にできるかどうかを単語の語彙特性と限定詞を変化させて網羅的な調査した研究でとても参考になる。

[19] 東郷雄二「《L'anaphore, cet obscur objet de recherche》—フランス語の〈指示形容詞 CE+名詞句〉照応」『人文』37集、1991、京都大学教養部。

[20] 東郷雄二「Y. Kawabata, auteur de « Kyoto », ou Y. Kawabata, l'auteur de « Kyoto »」『フランス語学研究』25号、1991.

[21] Van den Bussche, H., « Typologie des constructions dites appositives », *Travaux de linguistique* 17, 1988

※ほんとうの同格とは何かを論じた研究で、まず読むべき基本論文。

### 3. 雑誌の特集号

[22] *Langue française* 125号, 2000. 特集 Nouvelles approches sur l'apposition

[23] *Le français moderne* の1957年から1966年の号には、何を同格と認めるべきかを論じた論文が多数発表されている。